

本学職員表彰を実施 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）の実施と合格者の発表

お知らせ

・被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに





在青島日本国総領事と本学学生との意見交換会



研究室マネジメント研修

1 男女共同参画の取組について

■ 全学ニュース

- 2 本学職員表彰を実施
- 2 農学研究院の野口 伸教授が平成28年度北海道科学技術賞を受賞
- 3 木村 汎名誉教授がフジサンケイグループの第32回正論大賞を受賞
- 4 北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表
- 7 北大フロンティア基金
- 8 平成28年度春季外国人留学生フェアウェルパーティーを開催
- 9 ザンビアと北米（カナダ・米国）の北海道大学アンバサダー・パートナーを委嘱
- 9 平成28年 北大ペンハロー賞授与式を挙行
- 10 在青島日本国総領事と本学学生との意見交換会を実施
- 10 キャンパスマスタープラン2017応援ワークショップを開催
- 11 研究室マネジメント研修を開催
- 11 英語コミュニケーション研修を開催
- 12 平成28年度第2回北海道大学TF研修会を開催
- 12 第14回創成シンポジウム「科学と芸術のあいだ-アートが北大を変える-」を開催
- 13 新技術説明会を開催

■ 部局ニュース

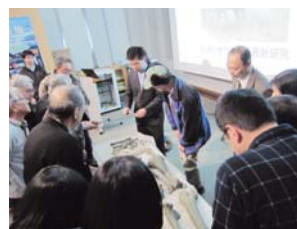
- 14 低温科学研究所がハワイ大学マノア校化学科と部局間交流協定を締結
- 14 歯学研究科がカトマンズ大学歯学部と部局間交流協定を締結
- 15 獣医学研究科と札幌市円山動物園が連携協定を締結
- 15 在札幌オーストラリア領事館 ロナルド・デイビッド・グリーン領事が農学院・農学研究院・農学部を訪問
- 16 教育学部 ESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム2016の全日程が終了
- 17 平成28年度水産科学院・水産学部外国人留学生送別懇談会を開催
- 18 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2016」を開催
- 19 平成28年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏技術職員研修を開催



低温科学研究所
ハワイ大学マノア校化学科と部局間交流協定締結



獣医学研究科
札幌市円山動物園と連携協定締結



総合博物館
冬季企画展示「北大古生物学の巨人たち」



大学文書館
医学部卒業生高須泰彦氏から関係資料受贈

- 20 附属図書館で第3回北海道大学の国際競争力強化のためのオープンサイエンスワークショップを開催
- 21 総合博物館で冬季企画展示「北大古生物学の巨人たち」を開催
- 22 医学部卒業生高須泰彦氏から関係資料を大学文書館で受贈

■ お知らせ

- 23 共済組合員の皆様へ
被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

■ 定年退職を迎えるにあたって 25

■ レクリエーション

- 49 平成28年度 北大山岳会事業登山記録

■ 諸会議の開催状況 50

■ 学内規程 50

■ 研修

- 51 平成28年度法人文書管理に関する研修会
- 51 「相手に伝わる文章の書き方」講座～業務実績報告書の作成例を交えて～

■ 表敬訪問 52

■ 人事 53

- 54 新任教授紹介

■ 訃報

- 55 名誉教授 上山 英一 氏
- 55 准教授 眞崎 睦子 氏
- 56 名誉教授 後藤 寛治 氏
- 56 名誉教授 米光 宰 氏



男女共同参画の取組について

副学長 望月 恒子



本学では平成16年度に男女共同参画委員会を設置して、男女共同参画推進のために様々な取組を行ってきました。3つの保育園（子どもの園、ともに、ポプラ）の設置、研究者を目指す優秀な女子学生を育成するための大塚奨励金創設などは、顕著な成果でした。また、平成18年度に設置された女性研究者支援室では、教育・研究と生活の両立支援のための環境整備や、女性研究者のキャリア形成につながる多様な施策を行ってきました。

ポジティブアクション北大方式への高い評価

日本では、欧米諸国と比較して、大学教員の女性比率が低いので、大学には特にこの点での改善が強く求められています。本学が平成18年度から実施してきたポジティブアクション北大方式は、その有効性を検証して付与ポイントや付与年数に変更を加えてきたことも功を奏して、女性教員の増加につながってきました。先日発表された「平成27年度に係る業務の実績に関する評価の結果」においては、本学の「男女共同参画に向けた積極的な取組の推進」が、高い評価を受けました。その理由には、「ポジティブアクションをさらに強化し、部局への人件費ポイント付与期間を2年延長し5年間としたことにより、過去最大の30名の女性教員を新規採用している」ことが挙げられています。

女性教員比率の目標値と現状

しかし、ポジティブアクション北大方式の効果は、ずっと続いているわけではありません。平成21～25年度には、

女性教員比率は0.6～1.0%の伸び率であったのに、平成26年度以後は0.4～0.5%と、伸び率が小さくなってきていることに注意しなければなりません。

男女共同参画に関して、本学には2つの数値目標があります。スーパーグローバル大学創成支援事業では平成35年度に女性教員比率21%以上、また第3期中期計画では、平成33年度に女性教員450名（約18%）以上、女性管理職比率15%以上と、目標を設定しました。女性管理職比率については、すでに13.9%（平成28年4月1日現在）に達しており、目標に近づいています。しかしながら、女性教員比率は現在13.8%（345名）（平成29年1月1日現在）に留まっており、最近の伸び率の鈍化を考えると、このままでは目標の達成は非常に困難と言わざるを得ません。財源の確保が難しい状況ですが、社会的要請もありますので、これまでの成果を活かしつつ、有効な方策を検討していかねばなりません。

最後に申し述べておきたいのは、男女共同参画推進の大きな目的の一つである「意志決定の場への女性の参加」が、本学では目標実現に程遠い状況にあるということです。組織的にも、また個々の構成員の自覚のレベルでも、努力が必要だと思っておりますので、今後ともご協力をお願いいたします。

■全学ニュース

本学職員表彰を実施



被表彰者と山口総長ほか列席者

2月27日（月）、総長室において「北海道大学職員表彰」表彰式が行われ、関係者列席のもと、山口佳三総長

から被表彰者に、賞状及びメダルが授与されました。

この表彰は、職務上顕著な功績等が

あった方及び職務外において職員の模範として表彰に値する善行を行った方を対象とするものです。

このたび表彰された方は、文学研究科・文学部事務職員の渡邊裕敬氏で、所属研究科・学部において、私費外国人留学生の受入手続きの一元化、海外の大学で修得した単位の認定に係る簡便な手続きの考案に尽力し、教員が担っていた多くの業務を著しく軽減させた他、留学生の生活上の諸問題の解決に精力的に関わる等、留学支援業務を積極的に行い、本学の国際化の発展に貢献されました。

（総務企画部人事課厚生労務室）

農学研究院の野口 伸教授が平成28年度北海道科学技術賞を受賞

農学研究院の野口 伸教授が「北海道農業のイノベーションに向けた農作業ロボットに関する研究」の功績により、平成28年度北海道科学技術賞を受賞され、授賞式が2月23日（木）にセンチュリーロイヤルホテルで行われました。

この賞は、科学技術上のすぐれた発明、研究等を行い、北海道産業の振興、道民生活の向上など経済社会の発展振興等に顕著な功績のあった個人に

与えられるものです。

同氏は、衛星測位システムを利用して農作業を無人化できるシステムを開発し、無人での走行に世界で初めて成功するとともに、衛星測位システムが使用できない環境でも使用できる内界センサを使用したロボットシステム、人に追従するロボット運搬車、水田防除用ロボットボートなどを世界に先駆けて開発しました。さらに、3台のロボットトラクタによる協調作業システ

ムも実現しました。

これらの研究成果は、北海道農業の労働力不足解消に極めて大きく寄与するほか、北海道に農業ロボット関連産業が生まれ、地域産業の活性化とともに雇用創出にもつながることが期待されます。

（農学院・農学研究院・農学部）



贈呈式の様子



受賞者記念撮影

木村 汎名誉教授がフジサンケイグループの第32回正論大賞を受賞

スラブ・ユーラシア研究センターの歴史を語るうえで欠かせない「顔」の一人である、木村 汎名誉教授が、この度フジサンケイグループの正論大賞を受賞されました。2月20日（月）にホテルニューオータニ（東京）で開催された贈呈式には、総長代理として本センターの岩下明裕教授がお祝いに駆けつけました。400名近い参加者の中には、小池百合子東京都知事の姿もあり、また、安倍晋三首相のビデオメッセージが流されるなど大いに盛り上がりました。なかでも目を引いたのは、受賞者の発表とともに、幼少時からの写真が大きなスクリーンにスライドで流され、後方の花道から受賞者が登壇するというショーアップでした。エン

ターテイメントでかつて視聴率を独占していたフジテレビならではの演出のもと、「自由と民主主義を守り、個人と国家の尊厳が大切にされる社会を築くために、『正論路線』を堅持する」と強調する産経新聞社の熊坂隆光代表取締役社長の主催者挨拶が印象的でした。

今回の木村先生の受賞は、「ロシアの歴史やクレムリンの内情について徹底した考察を重ね、プーチン大統領やエリツィン元大統領ら指導者像を精緻に描き上げることで、この巨大国家の実像を浮かび上がらせた」こと、長年、産経新聞で「正論」欄の執筆メンバーとして貢献されたことなどが評価されました。

スライドでは、幼少時から京都大学の学生時代、現在のご家族の写真などとともに、クラーク像の前で同僚たちと映る若き木村先生の姿が流れました。木村先生は受賞スピーチで、プーチン大統領がいる限り引退はしない、と生涯現役を宣言され、プロ野球の野村克也捕手に自らをなぞらえ、「生涯一ロシアウォッチャー」と語り、会場を沸かせていました。

スラブ・ユーラシア研究コミュニティへの木村先生のこれまでの貢献に感謝し、今回の受賞を改めてお祝い申し上げるとともに、今後も先生がご活躍を続ける姿を楽しみにしています。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



花道から入場する木村名誉教授



受賞スピーチを行う木村名誉教授



木村名誉教授ご夫妻と岩下教授

北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成29年度一般入試の前期日程試験は2月25日（土）・26日（日）に、後期日程試験は3月12日（日）に実施しました。また、私費外国人留学生入試第2次選考は2月16日（木）に実施しました。各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者は5,540名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が3名いました。失格者を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は5,537名で、受験者は5,396名でした。

合格者は2,068名で、合格発表は、3月8日（水）午前9時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が826名で全体の39.9%。卒業年度別では、平成29年3月高等学校卒業者が1,266名で全体の61.2%。また、男女別では女子が623名で全体の30.1%でした。

2. 後期日程

志願者は4,096名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が1名いました。失格者を除く志願者について、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は4,095名で、受験者は1,741名でした。

合格者は554名で、合格発表は、3月21日（火）午後4時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が124名で全体の22.4%。卒業年度別では、平成29年3月高等学校卒業者が341名で全体の61.6%。また、男女別では女子が120名で全体の21.7%でした。

3. 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は177名で、第1次選考の合格者は53名、第2次選考の受験者は43名、合格者は23名でした。

(学務部入試課)

平成29年度一般入試（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
総合入試	文系	100	379 (98)	3 (1)	376 (97)	3.8	109 (25)		
	理系	数学重点選抜群	130	418 (58)	12 (2)	406 (56)	3.1	139 (15)	
		物理重点選抜群	235	614 (72)	13 (1)	601 (71)	2.6	251 (23)	
		化学重点選抜群	235	580 (117)	14 (4)	566 (113)	2.4	251 (43)	
		生物重点選抜群	177	494 (206)	10 (6)	484 (200)	2.7	189 (77)	
		総合科学選抜群	250	701 (237)	22 (10)	679 (227)	2.7	268 (97)	
学部別入試	文学部	118	388 (203)	7 (5)	381 (198)	3.2	128 (72)		
	教育学部	20	68 (36)	1 (0)	67 (36)	3.4	20 (7)		
	法学部	140	319 (106)	4 (2)	315 (104)	2.3	144 (43)		
	経済学部	140	340 (99)	5 (1)	335 (98)	2.4	151 (48)		
	医学部	医学科	97	338 (66)	20 (0)	318 (66)	3.3	102 (22)	
		保健学科	看護学専攻	60	136 (121)	11 (8)	125 (113)	2.1	65 (57)
			放射線技術科学専攻	28	96 (27)	1 (0)	95 (27)	3.4	29 (5)
			検査技術科学専攻	28	87 (55)	0 (0)	87 (55)	3.1	29 (19)
			理学療法学専攻	13	35 (15)	0 (0)	35 (15)	2.7	14 (6)
			作業療法学専攻	13	47 (28)	5 (4)	42 (24)	3.2	14 (9)
			歯学部	30	102 (39)	3 (2)	99 (37)	3.3	31 (12)
	獣医学部	20	91 (52)	0 (0)	91 (52)	4.6	22 (15)		
	水産学部	105	304 (70)	10 (1)	294 (69)	2.8	112 (28)		
	計	1,939	5,537 (1,705)	141 (47)	5,396 (1,658)	2.8	2,068 (623)		

※ () 内の数字は女子で内数

平成29年度一般入試（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者		
学部別入試	文学部	37	373 (146)	210 (83)	163 (63)	4.4	44 (19)		
	教育学部	10	103 (42)	49 (16)	54 (26)	5.4	11 (3)		
	法学部	40	408 (100)	244 (63)	164 (37)	4.1	50 (8)		
	経済学部	20	208 (37)	145 (23)	63 (14)	3.2	20 (4)		
	理学部	数学科	13	79 (8)	45 (3)	34 (5)	2.6	15 (1)	
		物理学科	5	88 (11)	45 (4)	43 (7)	8.6	7 (1)	
		化学科	23	132 (21)	76 (9)	56 (12)	2.4	26 (5)	
		生物科学科 生物学専修分野	10	76 (20)	36 (9)	40 (11)	4.0	11 (3)	
		生物科学科 高分子機能学専修分野	5	44 (19)	30 (11)	14 (8)	2.8	6 (3)	
		地球惑星科学科	5	76 (16)	43 (7)	33 (9)	6.6	6 (0)	
	医学部	保健学科	放射線技術科学専攻	7	65 (25)	37 (14)	28 (11)	4.0	8 (4)
			検査技術科学専攻	7	63 (41)	43 (30)	20 (11)	2.9	8 (5)
			理学療法学専攻	4	37 (18)	22 (11)	15 (7)	3.8	4 (4)
	歯学部	8	104 (42)	45 (19)	59 (23)	7.4	10 (5)		
	薬学部	24	212 (67)	105 (35)	107 (32)	4.5	27 (6)		
	工学部	応用理工系学科	34	274 (24)	169 (14)	105 (10)	3.1	37 (2)	
		情報エレクトロニクス学科	38	277 (15)	174 (9)	103 (6)	2.7	40 (4)	
		機械知能工学科	30	256 (16)	161 (11)	95 (5)	3.2	31 (2)	
		環境社会工学科	49	352 (50)	188 (26)	164 (24)	3.3	57 (3)	
	農学部	53	421 (114)	268 (74)	153 (40)	2.9	59 (12)		
獣医学部	15	109 (54)	43 (17)	66 (37)	4.4	15 (9)			
水産学部	50	338 (94)	176 (52)	162 (42)	3.2	62 (17)			
計	487	4,095 (980)	2,354 (540)	1,741 (440)	3.6	554 (120)			

※ () 内の数字は女子で内数

平成29年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	25	(14)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
教育学部	教育学科	4	(1)	4	(1)	4	(1)	1	(0)
法学部	法学課程	9	(3)	3	(1)	3	(1)	3	(1)
経済学部	経済学科	8	(3)	2	(1)	1	(1)	1	(1)
	経営学科	13	(5)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
理学部	数学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	物理学科	7	(1)	3	(1)	3	(1)	2	(0)
	化学科	3	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生物科学科	12	(5)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	(生物学専攻分野)	9	(4)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	(高分子機能学専攻分野)	3	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	地球惑星科学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
医学部	医学科	2	(0)	2	(0)	2	(0)	0	(0)
	保健学科	2	(1)	2	(1)	2	(1)	2	(1)
	看護学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	放射線技術科学専攻	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	検査技術科学専攻	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	理学療法学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
	作業療法学専攻	-	-	-	-	-	-	-	-
歯学部	歯学科	1	(0)	1	(0)	0	(0)	0	(0)
薬学部	薬科学科	4	(2)	2	(1)	1	(0)	0	(0)
	薬学科	2	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
工学部	応用理工系学科	16	(5)	6	(2)	4	(0)	1	(0)
	応用物理学コース	5	(1)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	応用化学コース	8	(4)	2	(2)	0	(0)	0	(0)
	応用マテリアル工学コース	3	(0)	3	(0)	3	(0)	1	(0)
	情報エレクトロニクス学科	23	(3)	8	(1)	6	(0)	4	(0)
	情報理工学コース	11	(2)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	電気電子工学コース	7	(1)	6	(1)	4	(0)	2	(0)
	生体情報コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	メディアネットワークコース	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	電気制御システムコース	4	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	機械知能工学科	20	(3)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	機械情報コース	10	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	機械システムコース	10	(1)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	環境社会工学科	8	(4)	5	(4)	4	(3)	3	(3)
	社会基盤学コース	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	国土政策学コース	-	-	-	-	-	-	-	-
	建築都市コース	2	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	環境工学コース	4	(2)	2	(2)	1	(1)	1	(1)
資源循環システムコース	1	(0)	1	(0)	1	(0)	0	(0)	
農学部	生物資源科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	応用生命科学科	4	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)
	生物機能化学科	1	(1)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	森林科学科	1	(1)	1	(1)	0	(0)	0	(0)
	畜産科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	生物環境工学科	3	(2)	1	(1)	0	(0)	0	(0)
	農業経済学科	-	-	-	-	-	-	-	-
獣医学部	共同獣医学課程	2	(1)	2	(1)	2	(1)	0	(0)
水産学部	海洋生物科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	海洋資源科学科	-	-	-	-	-	-	-	-
	増殖生命科学科	5	(3)	5	(3)	5	(3)	3	(2)
	資源機能化学科	-	-	-	-	-	-	-	-
合 計		177	(61)	53	(21)	43	(14)	23	(10)

※ () 内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者		
ベトナム	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	
バルギー	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	
マレーシア	1	(0)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	
韓国	31	(7)	7	(1)	7	(1)	2	(0)	
台湾	5	(2)	1	(0)	1	(0)	0	(0)	
中国 (香港を含む)	138	(52)	45	(20)	35	(13)	21	(10)	
合 計		177	(61)	53	(21)	43	(14)	23	(10)

※ () 内の数字は女子で内数

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（2月28日現在）

19,966件 3,412,183,278円

2月のご寄附状況

法人等1社、個人77名の方々から3,083,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

富士通株式会社

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	赤木 利徳	浅野 賢二	東 克彦	石橋 潤	入澤 秀次	奥谷 充章	小内 透
小原 大和	婦山 雅秀	金川 眞行	金田 清志	河本 充司	小林 慶彦	斉藤 久	桜井 謙介
佐藤 敏彦	澤田 茂則	三升畑元基	清水 智之	蛇沼 俊二	関崎 勉	瀬名波栄潤	高桑 榮松
竹内 学	土家 琢磨	寺澤 睦	豊田 威信	中野 剛	松尾 克久	三國 雅彦	三田村好矩
山内 隆嗣	吉田 広志	脇川 康夫	渡部 昌				

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

富士通株式会社

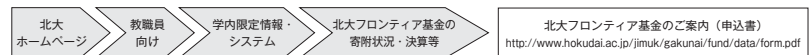
（個人）

東 克彦、石橋 潤、高桑 榮松、
中野 剛、三國 雅彦

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部署事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

④ クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ（<http://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>）のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

平成28年度春季外国人留学生フェアウェルパーティーを開催



集合写真

2月16日（木）、国際連携機構主催で、本年度で本学を卒業、修了する留学生を送別するフェアウェルパーティーを北部食堂で開催しました。

この行事は留学生数が増加する中、昨年度まで2月に開催していた外国人留学生歓迎・送別懇談会を分散開催することとしたもので、全学から105名の出席がありました。

パーティーは、寺尾宏明国際教育研究センター長の挨拶に始まり、司会の松田直樹さんと戸谷元拓さん（共に総合理系1年）の乾杯で開会しました。

卒業生を代表して、文学研究科歴史地域文化学専攻修士課程を修了するネステロビッチ・ビクトルさん（ロシア出身）から、研究に加えて、日本とその文化、北海道、札幌、そして人々について沢山のことを学んだこと、初めてスキーとスノーボードに挑戦したこと、多くの文化イベントに参加して母国についてのプレゼンテーションを行ったこと、そして、ここで過ごした時間は今までの人生で楽しく充実したものだった、との挨拶がありました。

パーティーでは、学内から応募の

あった先輩留学生及び新渡戸カレッジ生を中心としたボランティアスタッフの手で、企画と当日の進行が行われました。

アトラクションとして、ネパールからの留学生4人によるダンス、ジェスチャーで映画名を当てるクイズ、全員での歌と阿波踊りで盛り上がり、帰国が近い留学生は互いに写真を撮り合ったりメッセージを交換したりして別れを惜しんでいました。

（国際部国際教務課）



寺尾国際教育研究センター長の挨拶



司会の松田さん（左）と戸谷さん（右）



ビクトルさんからの挨拶



ネパールのダンス



談笑する参加者

ザンビアと北米(カナダ・米国)の北海道大学アンバサダー・パートナーを委嘱



ザンビア大学での委嘱式

2月17日(金)、ザンビアにおいて、北海道大学アンバサダー1名(ヴィクター・C・ズルー ザンビア大学上級講師)並びに北海道大学パートナー12名(ザンビア11名、南アフリカ1名)を委嘱しました。ザンビア大学獣医学部ボードルームで行われた委嘱式には、来賓として関山雄太在ザンビア日本国大使館書記官やルーク・E・ムンバ ザンビア大学副学長らにもご出席いただき、上田一郎理事・副学長より当日出席された7名のアンバサダー・パートナーに委嘱状が手渡され

ました。獣医学研究科の同窓生をはじめとする13名のアンバサダー・パートナーには、これまで培われている本学とザンビアとの繋がりをより深めていただくとともに、ザンビアをはじめとするアフリカ地域における北海道大学コミュニティの形成に期待が寄せられています。

また、2月20日(月)には本学において、ラシッド・スマイラ ブリティッシュコロンビア大学教授にアンバサダー(カナダ)、リカルド・マタ=ゴンザレス オレゴン州立大学准教授に



スマイラ アンバサダー(右)



マタ=ゴンザレス パートナー(右)

パートナー(米国)の委嘱を行いました。両氏には、これまで本学の研究活動や新渡戸カレッジ生の留学等にご助力いただいております。今後も北米における本学の教育・研究活動にご協力の申し出をいただいております。

(国際連携機構)

平成28年 北大ペンハロー賞授与式を挙行



授与式での記念写真

2月23日(木)、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、平

成28年北大ペンハロー賞の授与式を行い、新田孝彦理事・副学長から賞状の

授与と記念品が贈呈されました。

北大ペンハロー賞は、平成17年度から開始され、本学学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、都道府県規模の競技会・コンクールで優勝するなど、高い評価を受けた学生団体等を表彰する制度です。

今回は、11団体、40個人が受賞しました。今回までで、140団体、387個人の計527件に授与されています。

(学務部学生支援課)

在青島日本国総領事と本学学生との意見交換会を実施

2月2日(木)、北図書館西棟2階セミナールームにおいて、国際連携機構と在青島日本国総領事館の共催で在青島日本国総領事館の遠山 茂総領事と本学学生との意見交換会を実施しました。大使・総領事が地方を訪問する外務省の地域連携プログラムの一環で、遠山総領事が札幌を訪問する機会に本学学生との交流の場を設けることになりました。

当日は、公募に応じた中国からの留

学生9名、日本人学生2名、中国の大学院で学んでいる本学卒業生1名が参加し、遠山総領事からの「日中関係の現状と今後の見通しについて」と題した平成24年の日中国交正常化40周年以降の動き、両国間の問題、今後の見通しについてお話を聞いた後、自由闊達な意見交換を行いました。

学生からは、青島が所在する山東省にある日本企業の状況や、訪日観光客の増加など時事的な話題、自らの研究

分野に関する見解、民間交流の窓口を紹介してほしい等の幅広い質問がありました。

参加者は、来年の日中平和友好条約40周年に向けて、青少年、観光、経済、文化、スポーツ、地方という6分野での交流のうち、学生の交流を一層推進したいとの思いを共有しました。

(国際連携機構)



意見交換の様子



学生の意見を聞く遠山総領事



談笑する参加者

キャンパスマスタープラン2017応援ワークショップを開催

サステイナブルキャンパス推進本部では、2月14日(火)、学術交流会館第1会議室において、キャンパスマスタープラン2017応援ワークショップを開催し、53名(教職員36名、学生15名、学外2名)の参加がありました。

現行のキャンパスマスタープラン2006を改定するに当たって「学内外の多様なキャンパスユーザーに、キャンパスマスタープランの全学戦略における位置づけ、意義、役割を理解してもらおう」「キャンパスユーザーとしての多くの方の視点から、キャンパスの課題や長所を見つけ、提示してもらおう」「キャンパスユーザーが「キャンパスマスタープランに書かれていてほし

い」と考える要素は何かを洗い出す」ことを目的とするもので、今年度4回目の開催となります。

参加者は8班にわかれ、はじめに、策定に向けて検討中のキャンパスマスタープラン2017について、サステイナブルキャンパス推進本部キャンパスアセスメント部門長の小篠隆生准教授より説明を受けました。その後、以前に開催されたワークショップのテーマ「キャンパスマスタープランに書かれてほしいこと」「北大キャンパスがもっと楽しくなるには何があればよい?」の中で出された案「空間づくり」「学生の居場所」「交通」などから一つを選択し、「誰が、いつ、何

を、どうするのか」を考え、具体的な実行計画の提案を行いました。

このように、本ワークショップは、教職員と学生が同じ場所で協働する貴重な時間となりました。終了後には、「学生や他課の方と議論ができてよかった」「様々な意見に触れることができて楽しかった」「今後の北大において教職員+学生が利用者であることを頭に入れてほしい」等の感想が寄せられました。これらのワークショップの提案は、新しいキャンパスマスタープランや、その中のアクションプランの検討に役立てられる予定です。

(サステイナブルキャンパス推進本部、施設部)



小篠准教授の概要説明



ワークショップの様子



各班の発表の様子

研究室マネジメント研修を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教員に対するFDの一環として、1月27日（金）に高等教育推進機構S10講義室において「研究室マネジメント研修」を実施しました。

本研修は、高等教育開発（授業改善、カリキュラム改善）の具体的手法の開発・実施・評価等を専門に研究している大阪大学の佐藤浩章准教授を講師にお招きし、研究室運営・研究室教育に焦点を当て、多様なメンバーで構成される研究室内でどのように研究室の理念を共有するか、研究室における年間行事をどのように設計するか等について実際の研究室教育の事例を基に学び、自身の所属する研究室への応用を考えるための研修として実施したもので、本学教員13名、他大学等の教員4名が参加しました。

本研修は、講師による研究室マネジメントに関する講義の合間に、参加者

同士が互いの研究室における現状などを話し合いながら進められ、最後は各参加者の研究室におけるラボポリシーを作成しました。研究室運営のポリシーを持ってはいるものの、それをメンバーに明示していなかったり、曖昧なまま運用していた方もおり、ラボポリシーを作成することで、現在のメンバーだけではなく今後入ってくるメンバーにも有益となることが期待できます。

事後アンケートでは、「実際に作業



講師の大阪大学 佐藤准教授

を通し、ラボマニュアルを作成したのが役に立った」「条件の異なる研究体制をマネジメントされている先生方のお話を聞くことができた」等の意見が見られ、多くの参加者に好評でした。

高等教育研修センターでは、今後も教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



研修の様子

英語コミュニケーション研修を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教職員に対するFDの一環として、2月10日（金）・11日（土・祝）に高等教育推進機構S5講義室において「英語コミュニケーション研修」を実施しました。

本研修は、英語学習の教材製作及び企業・学校法人向け英語研修を行っている株式会社アルク教育社から講師をお招きし、英語による授業や英語でコミュニケーションできる教職員の増加を目的として実施したもので、道内大学等の教職員延べ60名が参加しました。

10日（金）はリスニング研修、11日（土・祝）はスピーキング研修として開催され、ほとんどの方は2日間連続で受講しました。本研修は参加受付開

始と同時に申し込みが殺到したため、急遽定員を増加して対応することにしたもので、英語研修への需要の高さを改めて実感しました。

事後アンケートでは、「普段、英語を話す・聴く際にあまり意識していなかったところを学べ、これからの学習の仕方が変わるような気がします」「多くのトピックについて、時間をか

けて話すことで、自分のスキルの不足しているところを認識できました」等の意見が見られました。

高等教育研修センターでは、今後も教職員を対象とした様々な研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



研修の様子



平成28年度第2回北海道大学TF研修会を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、2月14日（火）に高等教育推進機構S5講義室等を会場として、TF（ティーチング・フェロー）研修会を開催しました。本研修は、平成27年度からTF制度が本学において導入されたことに伴い、採用候補者である大学院生を対象として平成27年2月から実施しているものです。

TF制度は、大学院博士課程の学生を対象に、大学院教育の一環として、教員と分担しながら学士課程の授業を担う機会を与えることで、教育能力を高め、将来指導的役割を果たす人材を

養成するとともに、学士課程教育をより一層充実させることを目的としています。TFに採用される学生には、本研修会などのTF研修の修了を義務づけ、事前に理解を深めてもらうこととしています。

全体会では、新田孝彦高等教育推進機構長の挨拶に続き、「TFとしての心構え、クラスマネジメント、教育倫理綱領の理解」「シラバスの構成と読み方」といった、TFに関する具体的な内容の講演が行われました。

その後、アクティブラーニング実習が行われ、参加者は4～6名ずつのグ

ループに分かれ、設定されたテーマの下、グループ討議を行いました。最後にグループごとにその成果を発表し、教室全体で討論しました。

今回の研修会では、修士課程及び博士課程の学生70名が修了しました。どの参加者も積極的に研修に取り組んでおり、TFに高い意欲を持って臨んでいる様子が感じられました。

平成29年度第1回北海道大学TF研修会は8月に開催予定です。

（高等教育推進機構）



全体会の様子



アクティブラーニング実習の様子

第14回創成シンポジウム 「科学と芸術のあいだ-アートが北大を変える-」を開催

創成研究機構では、2月10日（金）、学術交流会館講堂において、第14回創成シンポジウム「科学と芸術のあいだ-アートが北大を変える-」を「TERRACE-科学とアートが出会う場所-」プロジェクトのキックオフイベントとして札幌国際芸術祭実行委員会と本学科

学技術コミュニケーション教育研究部（CoSTEP）との共催で開催しました。

本シンポジウムは、本学の研究と社会とのつながりについて、広く市民の方々に紹介し、より身近に感じていただくことを目的としています。14回目となる今回は、「科学とは何か、ア

トとは何か、共通点はあるのか」をテーマとし、科学者とアーティストがそれぞれの視点から語り合いました。

総合司会を務めた札幌人図鑑を主宰する福津京子氏の進行で、はじめに川端和重創成研究機構長より開催挨拶があった後、CoSTEPの朴 炫貞特任助教



川端創成研究機構長による開催挨拶



岩崎教授による講演の様子



音楽家の大友氏

による「北大で芸術祭ってなんだ？」と題してアートで北大を変えられるのではないかというオープニングトークがありました。続いて、metaPhorestを主宰する早稲田大学の岩崎秀雄教授より「『表現としての科学』の可能性から科学を再考する」と題し、生物学を研究しながら制作したアート作品の実例紹介を交えてご講演いただきました。

講演後は、岩崎教授のほか、「札幌

国際芸術祭2017ゲストディレクター／音楽家」の大友良英氏、理学研究院の相馬雅代准教授をパネリストに加え、朴特任助教がファシリテーターとなり、音楽家×研究者「音とノイズのあいだ」と題してトークセッションを行いました。参加者からは質問がいくつも寄せられ、市民の科学とアートに対する思い入れが伝わってきました。パネリストはユーモア溢れる活発な議論を展開し、会場全体が笑いに包まれる

場面も何度かありました。

最後に札幌国際芸術祭実行委員会事務局の熊谷 淳氏より閉会挨拶があり、盛会のうちに終了しました。当日は一般市民を中心に162名の参加者があり、アンケートからも科学とアートに対する市民の関心の高さがうかがわれました。

(創成研究機構)



トークセッションの様子



会場の様子



講演者とスタッフ

新技術説明会を開催

国立研究開発法人科学技術振興機構と本学産学・地域協働推進機構は、JST東京本部別館ホール（東京・市ヶ谷）において室蘭工業大学、北見工業大学、帯広畜産大学、北海道立総合研究機構、特許庁と共に1月19日（木）「ナノテク・材料・物づくり系」、1月26日（木）「ライフサイエンス系」の新技術説明会を開催しました。

本説明会は本学が主催者となり、北海道地区の大学・高等専門学校・公設試験研究機関の特許技術シーズを集

め、事業化及び共同研究を希望する企業等とマッチングを図るイベントです。当日は研究者自ら特許技術について説明し、面談を希望する企業との個別面談を行いました。

本学では、平成22年度から北海道地区の他大学・高等専門学校・公設試験研究機関等と連携して本イベントを開催しており、今回で7回目となりました。今回は「ナノテク・材料・ものづくり系」では8件の講演発表（本学研究者からの発表6件）がなされ、来場

者数240名、技術個別相談件数23件、「ライフサイエンス系」では8件の発表（本学研究者からの発表3件）がなされ、来場者数141名、技術個別相談件数15件と、両日共に大変盛況でした。今回引き合いをいただいた企業様に継続的なフォローを行い、今後の技術移転活動に反映させてまいります。

(産学・地域協働推進機構)



説明会会場の様子

■ 部局ニュース

低温科学研究所がハワイ大学マノア校化学科と部局間交流協定を締結

低温科学研究所では、2月6日（月）にハワイ大学マノア校化学科と部局間交流協定を締結し、調印式を行いました。調印式にはハワイ大学マノア校からMichael S. Bruno研究担当副代表ら3名、本研究所からは福井 学副所長、渡部直樹教授ら4名が出席しました。

ハワイ大学マノア校は1907年に設立されたハワイ州最大の総合大学で、医学、海洋学、海洋生物学、天文学等あらゆる領域に関する研究活動を行う研究機関です。今回の協定については、本研究所の渡部教授と同大学のRalf I Kaiser教授の共同研究を契機として取り交わされました。

調印式の後には互いの研究状況に関する活発な意見交換が行われました。今後、両機関の間で更なる共同研究活動の発展等、積極的な交流連携が期待されます。

（低温科学研究所）



協定書を取り交わすBruno研究担当副代表（右）と渡部教授（左）



調印式における関係者集合写真

歯学研究科がカトマンズ大学歯学部と部局間交流協定を締結



調印式参加者集合写真

歯学研究科は、2月5日（日）、ネパール国カトマンズ大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。

カトマンズ大学歯学部で開催された調印式には、歯学研究科から鄭 漢忠教授、林 利彦准教授ら4名が赴き、カトマンズ大学からは、Ram Kantha Makaju Shrestha学長、Rajendra Koju 副学部長、本研究科との関係が深い Chandan Upadhaya准教授ほか、関係者多数が参加して行われました。

カトマンズ大学歯学部は、首都カトマンズの北東約30キロ、海拔約1,650m

のDhulikhel地区に位置し、カトマンズ大学と地域医療の拠点であるDhulikhel病院との共同で、2001年に創設されました。現在では、新しい大学院プログラムが開設されるなど改革が進められています。

カトマンズ大学歯学部との国際交流は、日本口腔外科学会の国際医療協力活動がスタートした2008年に遡ります。2014年からは、毎年開催される日本・ネパールジョイントミーティングへの参加、協働手術や日本人若手歯科医師の臨床研修の実施、さらに、双方の大



調印後の記念撮影（左からUpadhaya准教授、Koju副学部長、Shrestha学長、鄭教授）

学への訪問を通じて交流を深めてきました。

調印式でShrestha学長は、協定締結は新たな関係の始まりであり、両校のこれからの交流発展を願う旨述べられました。今後は、新カリキュラムにおける歯学部生の短期留学や、教員・大学院生の派遣や受け入れ、国際共同研究の実施等、教育研究における更なる交流連携が期待されます。

（歯学研究科・歯学部）

獣医学研究科と札幌市円山動物園が連携協定を締結

獣医学研究科は、2月28日（火）に札幌市円山動物園との間で動物に関する教育研究活動の拡充に向けた連携・協働について連携協定を締結しました。調印式は札幌市役所で開かれ、稲葉 陸研究科長と加藤 修園長が協定書を取り交わしました。

この協定は、獣医学研究科と札幌市円山動物園が、相互の連携・協働を強化しながら、それぞれの資源・機能を

効果的に活用し、動物に関する教育研究活動の拡充を図り、動物の福祉、人・動物・環境の健全な共生、並びに動物園と大学の役割向上に寄与することを目的としています。

具体的には、飼育・展示動物の診療、繁殖及び調査研究に関すること、野生動物の保全活動に関すること、環境教育活動に関すること、人材育成及び相互交流に関する分野について連携

強化を図ります。

この連携協定を通じて、獣医学研究科では獣医学教育・研究及び獣医医療のより一層の推進、円山動物園では動物園獣医師の知識や技術向上等の人材育成につながる効果が期待されています。

（獣医学研究科・獣医学部）



協定に署名した加藤園長と稲葉研究科長（右）



握手を交わす加藤園長と稲葉研究科長

在札幌オーストラリア領事館 ロナルド・デイビッド・グリーン領事が農学院・農学研究院・農学部を訪問



グリーン在札幌オーストラリア領事（左から3人目）との記念撮影

2月10日（金）、ロナルド・デイビッド・グリーン在札幌オーストラリア領事が農学研究院を訪問され、横田篤研究院長、柳村俊介副研究院長、井上京副研究院長、野口伸教授と懇談しました。

懇談では本年4月設置の「国際食資源学院」におけるシドニー大学と連携した教育プログラムについて意見交換がありました。また昨年8月にオース

トラリア政府の海外留学奨学金制度である新コロング計画の下、シドニー大学の学生7名が農学部特別聴講学生として来学し、農学部や農学部と連携協定を結んでいる栗山町、平取町において農作業や地域の行事に参加して日本文化に触れる等の交流があったことが話題になりました。さらに、ピークルロボティクス研究室から今年度日本政府が行っている日豪準天頂衛星利活用

プロジェクトの進捗状況の説明がありました。

今後もオーストラリアと農学院・農学研究院・農学部、国際食資源学院の間で教育研究において積極的に交流していくことで合意し、活発かつ有意義な意見交換となりました。

（農学院・農学研究院・農学部）

教育学部 ESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム 2016の全日程が終了



報告会の全参加者

教育学部では、「社会の持続可能な発展にとって教育のもつ役割は何か？」を主題とした双方向型短期留学支援事業であるESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な発展のための教育) キャンパスアジア・パシフィックプログラムを、韓国・高麗大学校とソウル国立大学校、中国・北京師範大学、タイ・チュラロンコン大学及びロシア・サハリン国立大学と連携して、平成23年度から毎年度開催しています。

平成28年度のプログラムは、夏の事前学習により開幕し、昨年7月20日(水)～29日(金)の10日間にわたる北大プログラムや各ホスト大学プログラムを経て、2月15日(水)の参加学生による報告会をもって全日程を終了しました。

事前学習は、アイヌ民族文化についての理解促進と英語によるディスカッションスキル向上を目指し、ESD参加学生及びHUSTEP・国際交流科目受講生を対象として、今年度から開講しました。

北大プログラムでは、昨年度に引き続き「異文化理解と多文化共生」をテーマとし、アイヌ民族について理解することを目標としました。今年度か

ら連携を開始したサハリン国立大学のInna Korneeva准教授による講義に始まり、相互理解を深めるための地域問題を扱う課題解決型協同学習によるアクティブ・ラーニング (PAL: Place-based Active Learning) によるワークショップ、日高管内平取町でのフィールドワーク、総合討論などを行いました。終了後は北大生が5グループに分かれ、連携5大学へ短期留学し、各大学の特色ある秋季プログラムに参加しました。北大プログラムは高大連携へと発展させて、スーパーグローバルハイスクールである市立札幌開成中等教育学校との協働による講義が開講され、この交流事業は来年度以降も継続する予定です。

2月15日(水)に学術交流会館において実施した全て英語による最終報告会では、北大プログラムと各大学プログラムで学習した内容について派遣グループごとに報告がありました。派遣された各国が抱える政治的、文化的、環境的課題が紹介されるとともに、グローバルな視点に立った解決策についての提案がなされました。さらに、事前学習で交流した市立札幌開成中等教育学校から生徒34名と教員4名が参加し、生徒による自主研究の成果のプレ



学生による発表の様子



報告会の様子

ゼンテーションも行われました。報告会には、ソウル国立大学校師範大学から14名の学部生・大学院生・教員、並びに平取町フィールドワークで講師を務めていただいた萱野志朗氏、貝澤太一氏、門別徳司氏が参加され、鋭い質問やコメントをいただくとともに、活発な議論が行われました。

本事業は海外の有力協定校と連携し、個別大学の枠組みを超えて連携大学における教員・学生の相互交流と教育的資産の共有化を実現するキャンパス環境の創成を目的としています。教室におけるESD学習ばかりではなく、日常生活の共有を通して達成される学生の国際的な人脈形成によって、世界的課題である持続可能で安心・安全な社会と平和な世界をどのように構築するかを将来にわたって考え続けていける次世代の力量形成に大きな期待が寄せられています。

(教育学院・教育学研究院・教育学部)

平成28年度水産科学院・水産学部外国人留学生送別懇談会を開催

2月21日（火）函館国際ホテルにおいて、本年3月に修了・卒業する外国人留学生の送別懇談会を開催しました。懇談会には、外国人留学生とご家族のほか、函館キャンパス及び国際部の教職員、さらにおしよ丸の乗船実習に参加するカセサート大学からのゲストも含め、72名の出席がありました。

安井 肇研究院長の挨拶に続き、坂本秀敬国際部次長からの祝辞があり、今村 央国際交流委員会委員長の乾杯で開会しました。

和やかな懇談の後、修了・卒業する外国人留学生が紹介され、スピーチと記念品の贈呈式を行いました。スピーチでは、来日した当初の苦労話や大学生活の思い出、指導してくれた先生へ

の感謝の気持ち、今後の抱負を語り、会場は感動的な雰囲気になりました。

最後は、都木靖彰国際教育室長の乾杯の後、記念撮影を行い盛況のうちに閉会となりました。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）



挨拶する安井研究院長



祝辞を述べる坂本国際部次長



記念品贈呈式



歓談中の様子

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2016」を開催

先端生命科学研究院では、2月13日（月）に理学部7号館310室にて平成28年度FDSD研修会「総会2016」を開催し、教職員49名、事務部31名が参加しました。今年度も教育・研究担当の全教員及び研究室の事務・技術職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告とともに理学・生命科学事務部の業務報告も実施しました。

プログラム第1部では、出村 誠研究院長から本学が取り組む第3期中期目標・中期計画の概説とともに、先端生命科学研究院の今年度の「研究推進、教育改革、研究・教育環境、リスクマネジメント、サステナブル」への取り組みの概要説明がありました。第3期初年度に附属センターを改組し、ソフトマターグローバルステーションGI-CoRE、産業創出部門設置、先端研究基盤共用促進事業（新共用）ソフトマター機器共用ユニット（SMOU）

推進など、センターのユニット活動が紹介されました。教育改革では、大学院IGPプログラム、生命科学院FD研修「ループリック入門」、オープン教材制作（オープンエデュケーションセンターとの連携）、理学研究院アクティブラーニング推進室との連携活動の他、国際化に関する諸活動も報告されました。また、リスクマネジメントでは、個人情報・情報セキュリティの一元管理規程改正が周知されるとともに、海外出張中の組織的な危機管理への取り組みについても説明されました。

サステナブルへの取り組みでは、門出健次副研究院長から北キャンパス総合研究棟2号館の「2016年度夏次世代棟：省エネアクションプラン」の実施報告がありました。この実施には、サステナブルキャンパス推進本部、研究推進部、施設部、理学・生命科学事務部及び居住教職員が協力しまし

た。1ヶ月間の節電アクションの詳細な調査結果を公表し、最大11%の節電効果やその他の課題について総括がありました。

第2部では、理学・生命科学事務部の主要担当ごとに若手代表9名による業務活動報告がありました。教員からの質疑応答もあり、普段聞けない事務管理の難しさを知る良い機会となりました。研修会終了後には先端生命科学研究院と理学・生命科学事務部の意見交換会も行われ、今後の大学教育・研究環境の改善に教員と事務職員との協働が欠かせないという意識を更に深めることができました。

◆開催概要ホームページ

<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/advlfsci/>

（生命科学院・先端生命科学研究院）



会場の様子



出村研究院長



門出副研究院長



理学・生命科学事務部若手事務職員による活動報告

平成28年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏技術職員研修を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、2月14日（火）から16日（木）に、平成28年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏技術職員研修を開催しました。

この研修は、本学及び道内大学のフィールド系技術職員を対象に、職務に関する必要な専門的知識と技術等を広く修得させることを目的として開催したものです。今年度は26名が参加し、スマート農業など農林水産分野でも注目されている「ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）」「ロボット技術」をキーワードとして施設見学及び講義を行いました。

初日は、苫小牧市の株式会社Jファームにおいて、トマトやベビーリーフの生産が行われている最先端のスマートアグリプラントを見学しました。千歳市の千歳さけますの森さけます情報館では、さけます類のふ化放流の歴史や仕組み、生態などについて体験を通し

て学びました。また、オリオン機械株式会社千歳工場 千歳トレーニングセンターにて、最新鋭の搾乳ロボットの实演や工場内を見学しました。その後、懇親会が行われ、お互いに遠隔地にあるため普段はあまり交流できない技術職員と親睦を深め合い、お互いの業務について語り合いました。

2日目と3日目は、今回の研修のキーワードに沿って、理学研究院の栗原純一特任准教授による「超小型衛星・ドローンを用いた先進的農業リモートセンシング」、北海道立総合研究機構農業研究本部上川農業試験場の菅原章人氏による「北海道内のスマート農業活用例紹介」、地球環境科学研究院の藤井賢彦准教授による「地球温暖化・海洋酸性化が日本沿岸の海洋生態系に及ぼす影響」の講義が行われました。また、安全衛生の講義として、森林総合研究所北海道支所の佐山勝彦氏による「スズメバチの生態と刺傷被害」、安全衛生本部の川上貴教教授に

よる「いまさら聞けない安全衛生の基礎の基礎」が行われました。この他に、技術支援本部副本部長の松藤敏彦教授から「技術支援本部による技術職員一元化」に関する説明が行われました。さらに、5名の技術職員による技術発表と、今年度末に定年退職される生物生産研究農場の假屋洋人技術専門員と植物園の市川秀雄技術専門員による先輩講話が行われ、全日程を終了しました。

本研修を通して最新の研究等の情報を得るだけでなく、各施設での技術職員の業務内容についての相互理解や技術交流、親睦が深められました。

開催にあたりご指導とご協力をいただいた先生方、ご支援をいただいた事務担当者の方々に深くお礼申し上げます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



スマートアグリプラント



搾乳ロボット



栗原特任准教授による講義

附属図書館で第3回北海道大学の国際競争力強化のためのオープンサイエンスワークショップを開催

附属図書館は、研究戦略室・大学力強化推進本部・高等教育研修センターとの共催で、2月7日（火）、学术交流会館小講堂において、第3回北海道大学の国際競争力強化のためのオープンサイエンスワークショップを開催しました。

ワークショップは、「北海道大学におけるオープンサイエンスの状況と展望」をテーマとして、情報基盤センター長の高井昌彰教授から「オープンサイエンスを加速する情報基盤整備の展望」、文学研究科の竹澤正哲准教授

から「今なぜ人文社会系でオープンサイエンスが必要とされているのか～再現可能性問題を巡る世界の動き」と題した自身の立場や研究の中での事例を交えた講演がありました。

さらに、科学技術・学術政策研究所上席研究官の林和弘氏から「大学がオープンサイエンスに向き合うために必要な背景と要素とは：学術情報流通の変革と、研究・研究評価の新しい展開」と題した本学にとって今後のヒントとなるようなご講演をいただきました。

その後、富田健市附属図書館事務部長を加えた4名で「データのオープン化について」「オープンサイエンスをボトムアップ的に進めるためには」等をテーマとしてパネルディスカッションが行われました。

また、会場からも多くの質問があり、時間いっぱいまで活発な意見交換が行われました。

（附属図書館）



会場の様子



パネルディスカッションの様子

総合博物館で冬季企画展示「北大古生物学の巨人たち」を開催

総合博物館では、1月31日（火）から4月2日（日）まで、冬季企画展示「北大古生物学の巨人たち」を開催し、本学の古生物学研究の歴史と現在を紹介するとともに、総合博物館に収蔵されている貴重な化石標本や発掘資料を一般公開しています。

近年、恐竜研究について総合博物館では多くの情報を発信していますが、本学の古生物学研究には長い歴史があります。北海道帝国大学理学部地質学鉱物学科第二講座（地史学及古生物学）初代教授の長尾 巧は、戦前に当時日本領であった樺太で発掘し自ら命名した「ニッポノサウルス」の研究や、水生哺乳類「デスモスチルス」の世界初となる全身骨格の発掘・研究で知られています。それ以来、古生物界において本学は先駆的な立場で研究を進めてきました。

本企画展示では、北大古生物学研究

の基礎を作り上げた初代から5代目までの教授の功績を振り返り、研究に使用した化石標本を紹介しています。初代長尾教授のニッポノサウルスとデスモスチルスの実物標本や貝化石、第2代大石三郎教授の植物化石、第3代早坂一郎教授のフズリナ、第4代湊 正雄教授の二枚貝、第5代加藤 誠教授のサンゴ化石など、普段は収蔵庫に保管し、一般公開していない標本を展示しています。そして、伝統を受け継ぎ、国内外で活発な調査・研究を行っている、次世代の北大古生物学研究についても紹介しています。

オープニングセレモニーでは、中川光弘館長、「巨人」の一人である加藤名誉教授から挨拶があり、総合博物館の小林快次准教授が展示内容の説明を行いました。企画展をイメージした選曲によるチェンバロ演奏の後、テープカットを行い、企画展示室が公開とな

りました。内覧会では、加藤名誉教授ご自身が当時の研究について、来館者にお話しされる姿も見られました。

開催期間中は、ミュージアムマイスター認定コースの受講生や総合博物館ボランティアによる展示解説も行われています。関連セミナーも5回実施し、ご好評いただきました。理学院博士課程の高崎竜司さんが講師を務めた「ニッポノサウルスの最新研究」と題したセミナーでは、ニッポノサウルス化石の発見・発掘の様子や、様々な解明の過程、そしてハドロサウルス科恐竜の最新研究についての紹介がされました。特別に用意された化石標本を間近に観察することもでき、参加者からは熱心な質問がなされていました。

（総合博物館）



テープカットの様子（左から足奇動物化石博物館 澤村 寛館長、加藤名誉教授、中川館長）



加藤名誉教授の解説



期間限定で公開しているニッポノサウルスの全身骨格



関連セミナーで化石標本を観察

医学部卒業生高須泰彦氏から関係資料を大学文書館で受贈

1月23日（月）、2月3日（金）、6日（月）、17日（金）に、高須泰彦氏（医学部23期生）から、本学在学・在籍前後の関係資料を大学文書館にご寄贈いただきました。寄贈資料は、予科受験票、入学・採用・嘱託等の辞令書・通知書、予科桜星報告団名簿、成績表、身分証明書、奨学生手帳、同窓会誌、在学・在籍時の写真、予科卒業アルバムなどです。

高須氏は1941（昭和16）年4月に北海道帝国大学予科医類に入学し、1943（同18）年10月に医学部へ進学されま

した。翌1944（昭和19）年2月には海軍軍医学生に採用され、終戦後の1947（同22）年に卒業されました。1949（昭和24）年には大学院特別研究生となり、1953（同28）年に「耳鼻咽喉科領域における種々操作のヒアルロンダーゼ抑制物質に及ぼす影響」で旧制の医学博士号を取得されています。

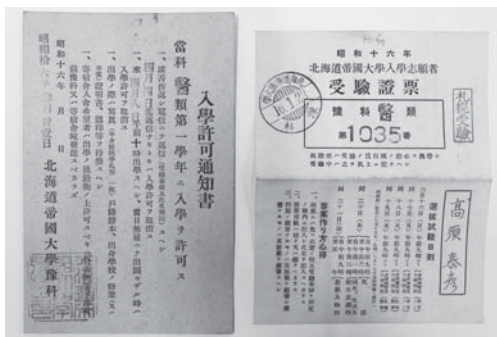
高須氏が本学に在籍されたのは、戦争と関連して短期間に大学制度が大きく変遷した時代です。高須氏も在学年限短縮、海軍軍医学生、大学院特別研究生といった、この時代に特徴的な経

歴を歩んでおられ、寄贈資料はそうした経歴を端的に示す貴重な資料です。

また、在学時の写真や卒業アルバムには、ゲートルを巻いた姿、軍事教練、配属将校が写っており、予科の講義の様子がわかる写真など、大変珍しいものばかりです。

ご寄贈いただいた資料については、今後、大学文書館において大切に保管し、展示などを通じて広く紹介してまいります。

（大学文書館）



予科医類受験証票・入学許可通知書（1941年）



ウィリー・クレンプ先生のドイツ語講義



予科建物・正門付近にて



軍事教練（1943年）

■お知らせ

共済組合員の皆様へ

被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

新たに被扶養者として認定となる場合、又は被扶養者としての資格を失う場合は、組合員証を添えて「被扶養者申告書」を下記の添付書類とともに、速やかに所属部局の共済事務担当係へ提出願います。

なお、届出が30日を超えると、組合員の皆様に不利益（医療費の返還・国民年金等）が生じる場合がありますのでご注意ください。

新たに被扶養者となる場合（認定）

1. 子供が生まれたとき・・・戸籍謄本等
2. 結婚したとき・・・戸籍謄本、住民票謄本、扶養の申立書等
3. 会社を退職したとき・・・戸籍謄本、住民票謄本、扶養の申立書及び雇用保険関係書類等
※住民票謄本は、世帯主及び世帯主との続柄について謄写省略不可です。
※配偶者の認定の場合は、同時に国民年金の変更手続きも必要となります。詳細につきましては、所属部局の共済事務担当係へお問い合わせください。

被扶養者が今年度中に満22歳に達し、来年度以降も引き続き扶養する場合（認定更新）

「扶養の申立書（認定更新用）」は、必須書類です。その他の添付書類は、学生：在学証明書等、無職：所得証明書、パート等：給与支給（見込）証明書等です。

※4月中に速やかに手続きをお願いします。所得証明書は、昨年収入のため7月初旬に提出してください。

被扶養者としての資格を失う場合（取消）

1. 就職したとき・・・①採用辞令の写し ②採用年月日確認のため在职証明書等
2. 死亡したとき・・・埋葬許可証若しくは火葬許可証の写し又は戸籍謄本
3. 所得が増えたとき・・・給与支給（見込）等証明書、年金受給者の場合は年金証書又は年金改定通知書の写し及び申立書、確定申告書の写し等

※将来に向かって1年間（注1）に130万円以上の収入が見込まれるときは、恒常的所得とみなし、見込まれる時点（給与の支給日ではなく、就労開始日等、被扶養者としての要件を欠くに至った事実が生じた日）において取消となります。

（注1）暦年（1月～12月）又は会計年度（4月～翌年3月）という特定の期間の所得ではなく、どの時点からも将来にわたり見込まれる所得です。

※年末調整における所得の見方とは異なりますのでご注意願います。

※130万円を12ヶ月で割った108,333円を月額限度額として参考にしてください。

※障害年金受給者、60歳以上の公的年金受給者は、180万円以上、月額15万円以上です。

※給与所得とは、通勤手当や賞与等の諸手当を含み、税金等控除前の給与所得総額を指します。手取りの金額ではありませんのでご注意願います。

※収入がある方は、「給与収入（見込）等証明書」と1年間で130万円を超えないこと等を記載した「念書」（就労する本人と組合員）を認定時や要件の確認時等に提出していただきます。その際、3ヶ月平均で、108,333円を超える月があるときは、どうして、月額が108,333円を超過するかの具体的理由を申立書に追記してください。

※給与支給（見込）等証明書の様式については、所属部局の共済事務担当より指定された様式を使用し提出願います。

※自営業の方は、毎月の収支がわかるように帳簿等をご用意願います。認定取消・認定継続の判断としてください。その上で収入が多い月に注意し、速やかに所属部局の共済事務担当者にご相談ください。（領収証等の保存をお願いします。）

※事業所得等については、必要経費の考え方が所得税法上とは異なり、限定されますのでご注意願います。

・必要経費：仕入れ品の代価（売上原価）、賃金（人件費）、消耗品費、事業所と住居が別の場合の地代家賃と光熱給水費（メーターが別）及び通信費（電話番号が別）、不動産所得の修理費及び管理費

< 注 意 >

- ①被扶養者としての資格を失っているにもかかわらず、扶養取消の手続きをせずに医療機関等で組合員証を使用した場合は、後日その分の医療費を返還していただくことになります。
特に、例年9月の組合員証等の扶養の確認時、あるいは所得税法上の所得調査等の関係で所得額超過が発覚し、高額な返還金が発生する事例が数多く見受けられますのでご注意願います。
なお、取消事実が判明したら、共済組合員被扶養者証を使用せず、部局等担当者に早期返戻願います。
- ②取消の届出が30日を超えてなされた場合は、上記の添付書類の他に「遅延申立書」が必要となります。（届出の遅延につきましては、財務省等の監査時においても厳しい指摘を受けていることから、速やかに届出をお願いします。）
- ③認定・取消、いずれの場合も必ず事実発生日を確認できる公的な書類及び証明書等の添付が必要となります。申立書のみでの認定・取消をすることはできませんので、ご承知おき願います。
- ④戸籍謄本等の証明書類については、3ヶ月以内に発行されたものを添付願います。
- ⑤共済組合への提出書類の訂正は、必ず訂正印を使用願います。（砂消・ホワイト不可）
- ⑥申告書、申立書等の申告者等氏名については、必ず署名（ゴム印等不可）となりますのでご注意願います。
- ⑦申告書等への押印については、シャチハタ以外の印鑑を使用し、鮮明に押印願います。
- ⑧申告書の申告年月日、申立書の記載年月日は訂正せず、申告書等を書き直してください。
- ⑨申告書は、認定・認定取消・認定更新はそれぞれを別の申告書でお願いします。
- ⑩不備がある場合は、受理することができないため、提出書類一式を返却させていただくことになります。
- ⑪申告書等の記載は、黒ボールペンを使用し、消せるボールペンは使用しないでください。

上記については一般的な例であり、この他にも認定又は取消の対象に該当する場合がありますので、被扶養者に異動があったときは、速やかに所属部局の共済事務担当にご相談願います。

なお、パートや事業所得及び雑所得（資産運用により生じた収入を含む）の月収入総額（通勤手当等含む）が3ヶ月平均で、108,334円以上となった場合は、給与証明書等を取り寄せ、見込みが年額130万円以上の場合は、認定取消手続きをし、見込みが年額130万円未満の場合は、申告書、申立書を所属部局の共済事務担当に提出し、認定が更新されます。

また、引越しをされて住所が変更になった場合は、「記載事項変更申告書」を所属部局の共済事務担当へ提出願います。その場合、組合員証等の住所は、ご本人で修正願います。

（文部科学省共済組合北海道大学支部）

■ 定年退職を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年退職される方々のお言葉と略歴を紹介します。

文学研究科教授

もちづき つねこ
望月 恒子 氏



平成6年4月に文学部助教授として着任し、23年間を北大で過ごさせていただきました。それまで複数の大学でロシア語を教え、それなりに忙しくしておりましたが、40歳を迎えてから、専門のロシア語ロシア文学の常勤職に就くことができたので、その喜びは非常に大きいものでした。あれから20年以上、学生たちはいつも素直で、生き生きと勉強して、スポンジが水を吸い込むようにロシア語を吸収してくれました。教育の楽しさは自分の研究にも刺激を与え、作家チェーホフやブーニンを中心に、北大の豊富な蔵書を存分に使って、ロシア文学を研究することができました。

平成20年に文学研究科長に選出された時、北大で初の女性部局長だと言われ、自分の世代でもまだ、「女性初の」という形容が付くことがあり得るのかと驚きました。それを皮切りに、後半は管理運営の仕事の割合がぐんと増え、附属図書館副館長や副学長を務めました。ストレスフルな時期もありましたが、これらの職のおかげで、北大という大きな組織を身をもって知ることができたと思っております。

一緒に仕事をして、力不足の私を支えてくださった、本当にたくさんの教員・職員の皆様に、心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年8月4日
昭和51年3月 東京大学文学部卒業
昭和53年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
昭和58年3月 東京大学大学院人文科学研究科露語文学専攻博士課程単位修得退学
平成元年4月 札幌大学非常勤講師
平成元年4月 駒澤大学非常勤講師
平成3年4月 北海道大学教養部非常勤講師
平成6年4月 北海道大学文学部助教授
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科助教授（文学部併任）
平成17年3月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成17年5月 } 北海道大学役員補佐
平成18年3月 }
平成18年4月 } 北海道大学大学院文学研究科副研究科長
平成20年3月 }
平成20年4月 } 北海道大学大学院文学研究科長・文学部長
平成22年3月 }
平成23年4月 } 北海道大学附属図書館副館長・北図書館長
平成29年3月 }
平成26年4月 } 北海道大学副学長・人材育成本部長
平成29年3月 }

文学研究科教授

やまだ ともゆき
山田 友幸 氏



私が子供時代を過ごしたのは第2次世界大戦後の復興期で、電話もテレビも一般家庭には普及していませんでした。その後テレビや電話が普及し、ステレオや車も普及したものの、私の大学時代は、卒業論文や修士論文はまだ原稿用紙に万年筆で手書きでした。やがて、ワープロ専用機やパソコンが手の届く値段になり、インターネットができ、国際会議をはじめとする研究上の国際交流が盛んになって、今ではノートパソコンやスマホで国内外の研究者とオンラインで討論できるようになり、学問の世界の日常は大きく変わりました。

私が北大に赴任した頃は、まだ日本の哲学者は日本語で論文や著書を書くのが普通で、私も外国語で論文を書くことは想定していませんでしたが、縁あって赴任直後の平成2年秋にスタンフォード大学に2ヶ月滞在した際、初めて英語で研究発表をしました。今では国内外の国際会議等で講演する機会も増え、論文も主に英語で書くようになり、世界中に知己ができるなど、北大での研究者人生は幸福であったと感謝しています。

しかし他方では、津波による福島第一原子力発電所の破壊が露にした科学技術文明の危うさやテロリズムの脅威、温暖化の進行に伴う気候の苛酷化など、明るい未来像を描きにくい時代になりつつあるのも事実です。北大には、苦難の時代を乗り越える力となる若者を文理ともに輩出してほしいと願っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年12月30日
昭和52年3月 東京大学文学部第1類卒業
昭和55年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
昭和58年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学
昭和58年4月 東京都立大学人文学部助手
昭和61年4月 信州大学人文学部助教授
平成2年4月 北海道大学文学部助教授
平成2年9月 } スタンフォード大学CSLI客員研究員
平成2年11月 }
平成8年1月 北海道大学文学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授（文学部併任）
平成15年9月 } スタンフォード大学CSLI客員研究員
平成16年7月 }
平成23年10月 } アムステルダム大学ILLC客員研究員
平成23年12月 }

医学研究科教授

さ さ き ひでなお
佐々木 秀直 氏



私は医学部生の時から神経学に関心を持ちました。症候学による論理的な局在診断学の魅力もさることながら、わからないことが多く、これから飛躍的な発展の期待される領域として関心を寄せました。卒業後、筑波大学附属病院レジデントとして2年間にわたり内科系各科で研修し、3年目から神経内科を専攻しました。研修を終えて母校に戻り、創設期の神経内科学教室（初代教授は田代邦雄先生）に一員として加えていただきました。

北大神経内科はgeneral neurologistとして、診療と臨床研究を通じて医療と教育に貢献しています。教室を引き継いで改めて認識したことは、道民が北大神経内科へ寄せる期待の大きさです。人手不足の中で、教育・研究・診療に努力している教室関係者に感謝しています。

母校で働いて30年が過ぎました。幸いなことに、その間、指導者、仲間、機会に恵まれました。2代目教授として神経内科の発展に尽力したつもりですが、まだまだ未熟であり、足跡に誇れるものはありません。はや定年となりましたが、特任教員としてさらに2年間、母校と神経内科の発展に尽くしたいと思います。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 8 月 1 日
昭和53年 3 月 北海道大学医学部卒業
昭和59年10月 博士（医学）（筑波大学）
平成 8 年 4 月 北海道大学医学部講師
平成14年11月 北海道大学大学院医学研究科准教授
平成15年 7 月 北海道大学大学院医学研究科教授

医学研究科教授

いわなが としひこ
岩永 敏彦 氏



平成6年から23年間お世話になりました。獣医学研究科と医学研究科を通じて組織学（顕微鏡を使った解剖学）の教育と研究に携わり、毎日染色と顕微鏡観察をして過ごしたという印象です。組織学は美しい世界に触れることのできる学問で、その点では色彩にあふれた豊かな学者人生だったと言えます。得られた成果を、存分に教科書やアトラスの作成に利用することができました。研究室の運営にはチームワークが重要ですので、毎日昼食やコーヒープレイクを教職員や学生と共有することを心がけてきました。

一方、2003年からは英文誌Biomedical Research誌の編集長を務め、札幌から世界に向けて研究成果を発信してきました（札幌の株式会社アイワードで印刷）。これは1980年創刊の隔月刊の医学生物学の学術誌ですが、学会や出版社の後ろ盾のない、いわば「同人誌」です。廃刊の危険性がありましたが、今では重要なデータベースにも収録され、インパクトファクターも付与されています。この編集業務は、後任が見つかるまで続ける予定です。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 3 月 22 日
昭和52年 3 月 帯広畜産大学畜産学部獣医学科卒業
昭和58年 3 月 新潟大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和58年 3 月 医学博士（新潟大学）
昭和58年 4 月 新潟大学医学部助手
平成 3 年 1 月 新潟大学医学部助教授
平成 6 年 9 月 北海道大学獣医学部教授
平成 7 年 4 月 北海道大学大学院獣医学研究科教授
平成15年 2 月 北海道大学大学院医学研究科教授

医学研究科教授

ありかわ じろう
有川 二郎 氏



札幌オリンピックの翌年に入学し、4年間の仙台（東北大学医学部）と2年間の米国留学期間を除き、38年間を北大で過ごしてきました。所属部局は移りましたが、それぞれ恵まれた教育研究環境であり、また美しいキャンパスのもとで過ごせたことを改めて感謝しています。

人獣共通感染症研究を一貫したテーマとし、ウイルスや細菌の実験室内での研究に加え、開発途上国を中心に海外20か国以上で流行調査や共同研究を行いました。様々な国の文化や自然に触れることができたことは興味ある経験でしたが、最も大きな喜びは、参加してくれた多くの若手研究者に、感染症研究によって国際的に貢献できるのだということを実際の活動を通して伝えることができたことです。国際性豊かな研究と研究者が増えることを願っています。また、微生物学講座を担当させていただき、幸せな研究人生であったと思っています。お世話になりました先生方、教室のスタッフ、事務職員の方々、また学生諸君に心からお礼を申し上げたいと思います。

管理・運営面では、動物実験委員会委員長と医学研究科附属動物実験施設長を担当し、貴重な経験をさせていただきました。大学を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、北大の益々の発展を信じています。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 4月24日
昭和52年 3月 北海道大学獣医学部獣医学科卒業
昭和52年 4月 東北大学医学部研究生
昭和56年 3月 北海道大学獣医学部助手
昭和60年 9月 獣医学博士（北海道大学）
昭和61年10月 米国感染症医学研究所研究員
平成 2年 1月 北海道大学免疫科学研究所附属免疫動物実験施設助教授
平成 7年 1月 北海道大学医学部附属動物実験施設教授
平成19年 4月 北海道大学大学院医学研究科教授

歯学研究科教授

しばた けんいちろう
柴田 健一郎 氏



昭和53年に京都大学の農学研究科修士課程を修了し、京都での6年間の学生生活を終え、岡山の民間企業の技術部に就職しました。就職後4ヶ月で東京の国立予防衛生研究所（現 国立感染症研究所）歯科衛生部に出向を命じられました。このことが契機になり、昭和56年4月には長崎大学歯学部助手に採用されました。平成元年6月から2年間の米国留学を終え、同3年7月に長崎大学に戻り、同年9月に北海道大学に転任してまいりました。平成13年8月には教授に昇進させていただきました。教授就任以来15年間で、満足できるほどではありませんが、それなりの業績は残せたような気がします。それは北海道大学という素晴らしい環境、教室のスタッフ並びに研究に携わってくれた大学院生のお陰であり、北海道大学と弟子達に心から感謝しております。

これまで、長崎、京都、岡山、東京、ニューヨーク、札幌といろいろなところを渡り歩きましたが、これまでの人生の中で札幌での25年が最も長く、札幌は第2の故郷になっています。今後の2年間は特任教授として研究・教育生活の締めくくりに時間にしたいと考えています。

最後に、これまでご指導・ご鞭撻いただいた数多くの皆様に深く感謝申し上げますとともに、北海道大学の今後益々の発展を祈念しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 5月26日
昭和51年 3月 京都大学農学部卒業
昭和53年 3月 京都大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和53年 4月 } 林原株式会社技術部研究員
昭和56年 3月 }
昭和53年 8月 } 国立予防衛生研究所歯科衛生部研究生
昭和56年 3月 }
昭和56年 4月 長崎大学歯学部助手
昭和63年 1月 歯学博士（東京医科歯科大学）
平成元年 6月 } 米国アルバート・アインシュタイン医科大学留学
平成 3年 7月 }
平成 3年 9月 北海道大学歯学部助手
平成 8年 4月 北海道大学歯学部助教授
平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成13年 8月 北海道大学大学院歯学研究科教授

獣医学研究科教授

かたくら けん
片倉 賢 氏



人生は旅であると言われる。道産子の私は、中学校・高校時代に3度の転校という旅を経験した。北海道大学理類に入学し、獣医学部へ移行したが、学生時代は登山とスキーに明け暮れ、北海道各地を山旅した。当時は、夢見る学生が海外貧乏旅行に出かけた時代であり、私もネパールなどに出かけた。その時、タイでの小型哺乳類の寄生虫に関する学術調査に参加する機会をもらった。それが契機となり、学術調査や研究を通じて、異文化に触れ、動植物に接し、多様な自然環境に身を置いて、「地球を知る旅」「未知の生物を探る旅」をすることに意義と目標を見出した。就職後は関東地方で暮らしたが、その間、米国留学、南米・アジア・中国などで人体寄生虫症に関する学術調査に参加した。

平成16年に北海道大学の現職に就いた後、家畜の寄生虫に関する学術調査を主催した。舞台はミャンマーである。旅には発見があり、出会いがある。多くの学生を海外調査に連れていった。また、部活動の意義を鑑みて、北大山スキー部の顧問教員を8年間務めた。地球上にはもっともっと知らない世界がある。感性としての「ワクワク感」は人間の原動力となる。厳格な管理体制は大学教育にはなじまない。ワクワク感の創出という教育の原点に立ち返り、いま少し奮闘する所存である。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年 4月19日
 昭和52年 3月 北海道大学獣医学部獣医学科卒業
 昭和54年 3月 北海道大学大学院獣医学研究科形態機能学専攻修士課程修了
 昭和54年 4月 東京慈恵会医科大学寄生虫学講座助手
 昭和61年 7月 医学博士（東京慈恵会医科大学）
 昭和62年 7月 } シカゴ医科大学微生物学・免疫学講座客員研究員
 平成元年12月 }
 平成 4年10月 東京慈恵会医科大学熱帯医学講座講師
 平成10年10月 群馬大学医学部寄生虫学講座助教授
 平成15年 4月 群馬大学大学院医学系研究科国際寄生虫生態学分野助教授
 平成16年 6月 北海道大学大学院獣医学研究科教授

情報科学研究科教授

はらぐち まこと
原口 誠 氏



私が最初に北大の地を訪れたのは、確か、大学院の学生時代に何かの研究会に参加した時だと記憶しています。2月の寒い時期で、九州生まれで九州育ちの私にとっては、とても寒かったのと、一面の雪でこれまたとても静かに感じたことを今更ながら思い出します。札幌駅から宿泊先の琴似までJRで移動したのですが、車内もシンと静まりかえり、『なるほど、北国では九州人のように大口を開けてお喋りすることはないのだ』と勝手に推測し、かつ納得したものです。それから時が経ち、前任地の横浜から北大に赴任する準備のため、これまた2月に一度工学部を訪れました。玄関に入るやいなや、顔みしりの先生から笑顔で迎えていただき、また、外の静寂の世界とは対照的に快活に話しながら廊下を行き来する多くの先生方や学生達とすれ違い、『なるほど、学問するときは北国といえども九州とは変わらないのだ』と妙に得心したことも懐かしく思い出されます。また同時に、雪景色の広大なキャンパスを学問の白地のキャンパスに見立て、そこに自由に絵を描かせる包容力のある大学だとも直観したのです。良い絵を描けたかどうかは、全く自信はないのですが、退職後も特任教員として許された時間を最大限に活かし、達磨の眼を描いた上で去りたいと思う今日この頃であります。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 2月 4日
 昭和51年 3月 九州大学理学部数学科卒業
 昭和53年 3月 九州大学大学院理学研究科数学専攻修士課程修了
 昭和54年 2月 九州大学大学院理学研究科数学専攻博士課程中退
 昭和54年 2月 鹿児島大学理学部助手
 昭和56年 6月 九州大学理学部附属基礎情報学研究施設助手
 昭和59年12月 理学博士（九州大学）
 昭和62年10月 東京工業大学大学院総合理工学研究科助教授
 平成 7年 4月 北海道大学工学部教授
 平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成16年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

情報科学研究科教授

やまもと つよし
山本 強 氏



昭和53年に本学工学研究科電子工学専攻を修了し、民間企業や大学院生を経て同57年に工学部に職を得て以来、情報科学分野の研究に没頭してきました。好きで始めた情報やエレクトロニクスの仕事ですし、在職期間中は先輩教員、事務部の方々、そして企業経営者たちに囲まれて研究、教育、そしてビジネスに取り組むことができたということで、私は北大の恵まれた環境で教員生活を送れたことに感謝しています。

私の現役時代はマイクロプロセッサ、コンピュータグラフィックス、2度の人工知能ブームと情報科学分野の研究トピックスが目白押しで、この分野で活動できたことは幸いでした。研究成果を技術移転して大学発ベンチャー企業を立ち上げたり、出資したりもしましたが、大学人としては「変な人」だったと自分でも認識しています。

教員生活の後半は、情報基盤センターや産学・地域協働推進機構の仕事を兼務することになり、組織運営の仕事が増えましたが、おかげさまで一教員では得難い学内外の多くの方々との接点を得ることができました。これも得難い経験です。

今後2年は特任教員として、組織運営を離れて研究と教育に専念できるそうなので、生涯一研究者の原点に戻って、新しい取り組みを始めたいと思っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和28年12月16日
昭和51年 3月	北海道大学工学部電子工学科卒業
昭和53年 3月	北海道大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了
昭和53年 4月	富士通株式会社
昭和55年 3月	
昭和57年 3月	北海道大学大学院工学研究科電気工学専攻博士課程中退
昭和57年 4月	北海道大学工学部講師
昭和61年 6月	工学博士(北海道大学)
昭和61年12月	北海道大学工学部助教授
平成元年 7月	北海道大学大型計算機センター助教授
平成7年 4月	北海道大学大型計算機センター教授
平成11年 4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年 4月	北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成17年 4月	情報基盤センター長
平成23年 3月	
平成24年 4月	産学連携本部副本部長
平成27年 3月	
平成27年 4月	産学・地域協働推進機構副機構長
平成29年 3月	

水産科学研究院教授

あらい かつとし
荒井 克俊 氏



昭和51年に水産増殖学科を卒業後、大学院に進学しましたが、博士後期課程の途中で北里大学水産学部に助手の職を得て、北大を離れることとなりました。その後、広島大学生物生産学部の勤務を経て、平成11年に水産学部教授に採用され、函館キャンパスで18年を過ごし、この度、定年退職を迎えます。この間、様々な形でご指導、ご鞭撻、またご支援をいただいた多数の皆様へ深く感謝いたします。

学生時代は小さな電気泳動槽と生物顕微鏡のみでサケマス類の雑種の発生と遺伝の研究を行っていました。しかし、大学に職を得てから現在まで、特に遺伝子に関わる領域で飛躍的な技術革新があり、新しい解析法が次々に取り入れられ、時代に取り残されないように研究環境を整備することに苦勞しました。しかし、優れた共同研究者や留学生を含む多くの大学院生らとの協働により、魚類の遺伝学と発生生物学を基盤に、水産における育種理論と技術の体系化に向けて、多少なりとも貢献できたことは誇りとするところです。また、北大赴任直後にドジョウの自然クローンと倍数体における特殊な生殖を見出し、ドジョウをモデルとした性と生殖の多様性とゲノム構成との関係解明の研究に全力を注いだことは、サイエンスに携わる者として大きな喜びでした。

定年退職となりますが、まだ時間は残されていますので、一歩でも二歩でも、サイエンスを進めたいと思っています。最後に、北海道大学の益々の発展をお祈りいたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和29年 3月 8日
昭和51年 3月	北海道大学水産学部水産増殖学科卒業
昭和53年 3月	北海道大学大学院水産学研究科水産増殖学専攻修士課程修了
昭和55年 4月	北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程退学
昭和55年 5月	北里大学水産学部助手
昭和59年 6月	水産学博士(北海道大学)
昭和59年10月	北里大学水産学部講師
平成元年11月	広島大学生物生産学部助教授
平成11年 4月	北海道大学水産学部教授
平成12年 4月	北海道大学大学院水産科学研究科教授
平成17年 4月	北海道大学大学院水産科学研究院教授

地球環境科学研究院教授

さかいりのぶお
坂入 信夫 氏



平成6年2月に北海道大学へ赴任し、23年間教育・研究に携わらせていただきました。北海道大学赴任前は、埼玉県和光市の理化学研究所で研究を行っておりました。関東育ちの私にとって、雪の札幌へ赴任したのも驚きですが、地球環境科学研究所が設立された直後で、研究室を一から立ち上げるのも初めての経験でした。しかし、数々の変化の中で最も大きなギャップを感じたのは、それまで理学的な見地から行ってきた糖鎖合成研究から、実学である環境科学の中で糖鎖研究を行わねばならない点でした。「糖質は生物によって代謝されるので環境にやさしい」あるいは「糖質は、光合成の主要産物であるにもかかわらず、まだ石油資源のように十分には活用されていない」などと自分に言い聞かせても、生物がいつも簡単に糖質を使いこなしているのには到底及ばないという思いでした。その後、多くの大学院生と共に糖鎖の研究を続けて現在に至りますが、そのギャップは益々広がってしまったという思いです。

あと2年は特任教員としてお世話になる予定です。もう一度、糖鎖を見直すチャンスにしたいと考えています。最後に、研究を共にした学生やスタッフ、教職員の皆様のご支援に深く感謝いたします。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和28年7月22日
- 昭和51年3月 東京工業大学理学部化学科卒業
- 昭和53年3月 東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了
- 昭和56年3月 東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了
- 昭和56年3月 理学博士（東京工業大学）
- 昭和56年4月 理化学研究所流動研究員
- 昭和57年4月 鶴見大学歯学部助手
- 昭和60年1月 理化学研究所研究員
- 平成4年3月 理化学研究所前任研究員
- 平成6年2月 北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授
- 平成10年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
- 平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

地球環境科学研究院教授

たかだ たけのり
高田 壯則 氏



「三十年間好景が続く商売は一つもない」

呉服商を営んでいた母方の祖父が残したこの家訓を、退職間近になった今日この頃よく思い出します。長い丁稚奉公時代を終えて研究職に就いてから、ほぼ30年経過したということも理由の一つだが、現代では1サイクルの長さが30年から10年に変化しているのではないかと感じるからである。その当時としては新しいネーミングの理論生物学講座の寺本 英先生に師事したのが38年前、長い丁稚奉公を終え奉職した頃にはコンピューター環境は大きな変貌を遂げ、パソコンを持たずして研究などできない環境になっていた。学生時代に組み上げた大型計算機を使うIndividual-based model in plantsのシミュレーション時間は丸3日だったのに、その10年後には20分で計算を終えるようになっていた。通信環境も電子メールがなかった時代からスマホでラインを使う時代へと大きな変化があった。

このような変化著しい時代の中で、「生物学への数理モデルの応用」というテーマに携わり、研究を続けてこれたことは本当に幸いだった。一つひとつの研究が白地キャンパスのワンタッチだとすれば、まだ塗られていない場所は多々あるけれど、一枚のキャンパスで研究を続けることができたわけである。それは、出身研究室の先輩後輩たち、所属大学の諸先生たちの陰日向にわたる応援がなければ成し遂げられなかったことだろう。退職にあたり私の研究生生活を支えてくれた皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

略 歴

- 昭和54年3月 京都大学理学部卒業
- 昭和56年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
- 昭和61年3月 博士（理学）（京都大学）
- 昭和63年4月 北海道東海大学国際文化学部講師
- 平成4年4月 北海道東海大学国際文化学部助教授
- 平成11年4月 北海道東海大学国際文化学部教授
- 平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

理学研究院教授

ひなつ ゆきお
日夏 幸雄 氏

この度、定年退職を迎えることになりましたが、4月からは再雇用という形であと2年お世話になる予定ですので、実感がわかないというのが正直な感想です。

日本原子力研究所に10年半、米国のオークリッジ国立研究所とローレンス・バークレー国立研究所に合せて2年半在籍した後、22年前に北大に着任いたしました。研究対象は、一貫して「f電子系元素であるアクチノイドやランタノイド（希土類）を含む無機化合物の磁氣的性質」ですが、自分の好奇心に沿った基礎研究ができる場を与えられましたことは、とても幸いでした。北大に来るまで教育経験がありませんでしたし、口下手なため、講義を含め、教育の難しさをずっと感じながらの22年で、皆様にはご苦勞をお掛けしたと思います。このような私が無事に過ごせましたのも、諸先生方、職員の方々のご教示とご支援のお陰です。ここに心より深く感謝申し上げます。

社会から大学に対する要請が大きく変化し、余裕がなくなってきている今日ではありますが、いつまでも素晴らしい自然と研究環境を生かし、人を育てることを大切にしている北海道大学であってほしいと願っております。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年7月5日
昭和52年3月 大阪大学工学部卒業
昭和54年3月 大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
昭和57年3月 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了
昭和57年3月 工学博士（大阪大学）
昭和57年4月 日本原子力研究所東海研究所研究員
平成3年4月 日本原子力研究所東海研究所副主任研究員
平成7年7月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

きたむら のぼる
喜多村 昇 氏

理学部化学科教授として赴任以来24年間、好きな研究で給料をいただいてきたことは人生最大の贅沢だったと思います。北大赴任時は実験台があるだけの研究室で研究費も校費のみ、どうやって学生を育てるのか不安だらけだったことを思い出します。フェムト秒レーザーや共焦点顕微鏡等の設備を揃えるまで10年程かかりましたが、何とかこれまで来られたのも研究室を支えてくれた教員・学生並びに化学科の諸先生方のお陰と心から感謝しています。また、総合化学院の設置や入学者選抜にも携わらせていただきましたが、その際にも多くの教職員のご支援をいただきました。

忘れられない出来事の一つは、入試総務部門長として携わった平成20年度入試です。試験前日に新千歳空港が積雪で封鎖となったために、2月25日予定の前期日程試験を26日に延期するという苦渋の選択を強いられました。幸い、試験延期は良い判断だったと概ね賛同を得られましたが、受験生・父母からお叱りの電話が入試課に沢山かかってきたのも事実です。今となっては懐かしい思い出です。教育・研究とともに学内運営にも微力ながら携わらせていただきましたが、北大の発展に多少なりとも貢献できたのであれば望外の幸せです。最後に、北大の更なる発展を祈念申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年7月19日
昭和51年3月 東京都立大学工学部卒業
昭和53年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科修士課程修了
昭和53年4月 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程中退
昭和53年5月 東京工業大学資源化学研究所技官
昭和55年10月 東京工業大学資源化学研究所助手
昭和58年10月 理学博士（東京工業大学）
昭和63年10月 新技術開発事業団創造科学技術推進事業（ERATO）増原極微変換プロジェクト技術参事
平成5年4月 北海道大学理学部教授
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授
平成22年4月 } 北海道大学大学院総合化学院長
平成24年3月 }

理学研究院教授

つだ いちろう
津田 一郎 氏



平成5年9月末、家族とともに早朝フェリーで小樽港に着き、金山パーキングエリアで時間調整の後、宮の森の宿舎に入った時のことは今でも感慨深く思い出される。足早に冬が訪れ、ハラハラと「天からの手紙」が舞い降り、同じくこの年赴任した同僚が「雪は人の意識を変えますね」と言った時、本当に北の大地に来たのだという実感が心に湧いてきたのだった。私のように関西で育った人間は、北海道にあこがれるものだと相場が決まっている。学生の頃は特にそうである。それで、大学生になるとまず北海道旅行をするのだが、中には居着いてしまう人もいる。この土地の人と接すると、ゆったりとしたやさしい時間が心に流れるのを感じるからだろうか。私は、彼らへの共感の気持ちをぐっと押さえて本州に戻ってきたのを覚えている。

あれからちょうど20年後に北大に赴任し、早23年が過ぎた。北大での研究と教育と運営の生活はとても素晴らしいものだった。特に私は数学者集団の中にいることに無類の喜びを感じた。私にはこの人たちの思考・行動の全てが「天からの手紙」であり、私の意識をゆったりと変える贈物であったからだ。贈物のお返しはなかなかできなかったが、新しい場所からの相互作用によってそれが実現できると信じている。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和28年6月4日
- 昭和52年3月 大阪大学理学部卒業
- 昭和54年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
- 昭和57年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
- 昭和57年4月 日本学術振興会奨励研究員
- 昭和57年10月 新技術開発事業団水野バイオロニクスプロジェクト研究員
- 昭和57年11月 理学博士（京都大学）
- 昭和63年4月 九州工業大学情報工学部助教授
- 平成5年10月 北海道大学理学部教授
- 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
- 平成17年10月 北海道大学電子科学研究所教授
- 平成20年4月 } 北海道大学数学連携研究センター長
- 平成27年3月 }
- 平成24年10月 } 北海道大学電子科学研究所副所長
- 平成25年9月 }
- 平成27年10月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

こざ たかし
小笹 隆司 氏



平成11年7月に赴任して以来、17年9ヶ月間北海道大学にお世話になりました。赴任時期を7月にした理由の一つは、神戸の暑苦しい夏から逃れることでしたが、その年の夏の札幌は非常に蒸し暑く、赴任時期を間違えたと後悔したことを未だに覚えています。一方、本州の夏の濃い緑と違った札幌の木々の淡い緑は、目に鮮やかで美しく心が癒されました。在任中には長年のテーマである銀河ダストの起源と進化の研究を、大学院生を含む国内外の研究者と共同して進展させることが出来ました。

社会の動きに惑わされずに研究活動を行える場として、北海道大学が発展することを期待しています。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和28年11月12日
- 昭和53年3月 京都大学理学部卒業
- 昭和55年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
- 昭和59年3月 京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学
- 昭和59年4月 京都大学理学部研修員
- 昭和60年4月 東京大学宇宙線研究所教務補佐員
- 昭和60年11月 理学博士（京都大学）
- 昭和62年4月 京都大学理学部研修員
- 平成2年4月 マックスプランク協会核物理学研究所外国人科学者
- 平成4年4月 拓殖大学非常勤講師
- 平成6年7月 神戸大学理学部助手
- 平成11年7月 北海道大学大学院理学研究科教授
- 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

すずき のりゆき
鈴木 德行 氏

平成6年10月に理学部に赴任してから22年以上の年月が流れ、定年退職の時を迎えることとなりました。この間、緑豊かなキャンパスと素晴らしい自然に囲まれた札幌・北海道で過ごすことができ、かけがえのない時間を持つことができました。また、本学で身近に接した方々から多くの知的刺激を受け、地下深部の有機化合物や分子状水素に関する研究教育を大きく発展させることができました。このような環境で今日まで学究の道を歩むことができましたことを本当に幸せに思います。これからも大好きな北の大地で学問に勤しみ、社会貢献に努め、人生を満喫したいと計画しているところです。

今、大学院重点化や21世紀COEプログラムが遙か昔の出来事のように思い出されます。本学が国立大学法人へと移行したのは13年ほど前のことでした。その後の中期目標・中期計画、総長ガバナンスの強化などによって、法人化は次第に形を整えつつあります。この明治以来の大改革が見事に実を結び、本学において多くの優れた人材が育ち、社会に羽ばたいていくことを願ってやみません。

末筆ながら、本学にて身近に接しお世話になった多くの皆様に心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和28年 8月18日
昭和53年 3月	東北大学理学部卒業
昭和55年 3月	東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了
昭和56年 4月	東北大学大学院理学研究科博士後期課程退学
昭和56年 5月	島根大学理学部助手
昭和60年 9月	理学博士（東北大学）
平成元年 4月	島根大学理学部助教授
平成6年10月	北海道大学理学部助教授
平成13年 4月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院教授
平成23年 4月	北海道大学大学院理学研究院副研究院長
平成27年 3月	
平成27年 4月	北海道大学大学院理学院長
平成29年 3月	

理学研究院教授

あらい あさお
新井 朝雄 氏

エルムやポプラの大樹が茂る美しい広々としたキャンパス、そして日本の大学の中では類いまれな好立地条件に恵まれた本学に昭和61年6月に赴任し、以来、ほぼ31年間にわたり、数学・数理物理学の研究と教育に従事してまいりました。専門図書や学術雑誌など研究資料が充実している本学の優れた環境の中で研究を続けられたことを、本当に有り難く思っております。おかげ様で世界をリードする研究を担うことができました。

赴任した6月初旬の札幌は、それ以前に留学していたドイツやスイスと同じように湿度が少なく清々しい空気に満ち、新緑に映える北大のキャンパスや札幌中心部の街路の美しさに深く感動したことを懐かしく思い出します。

私の出身地埼玉県秩父市など伝統に根付く他の日本の地域とは違った、独特の魅力をもつ北の大都市札幌で、現代的な都市生活を営みつつ、北海道の豊かな自然に多々接することができたことにも深く感謝しております。

近年、大学を取り巻く状況には厳しいものがありますが、本学の有する独自の良き伝統を継承しつつ、本学が将来益々発展していくことを祈念しております。

略 歴

生 年 月 日	昭和29年 1月10日
昭和51年 3月	千葉大学理学部卒業
昭和51年 9月	東京工業大学大学院理工学研究科修士課程中退
昭和54年 3月	東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
昭和55年 3月	東京大学大学院理学系研究科博士課程中退
昭和55年 4月	東京工業大学理学部助手
昭和61年 6月	北海道大学理学部講師
昭和61年10月	理学博士（学習院大学）
平成4年 3月	北海道大学理学部助教授
平成7年 4月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

いなべ たもつ
稲辺 保 氏



本年3月をもって定年を迎えます。北大に着任してからちょうど25年になりますが、かつて学生時代を過ごした研究室を引き継ぐ形だったため、勝手にわかっていた点はラッキーでした。ただ、この25年の間を思い起こすと、教育者・研究者として十分な指導ができなかったこともありましたが、しかし、それでも学生はしっかりと成長しており、細かく指導するだけが教育者の努めではないということも逆に学んだ気がします。

着任当時に比べると、学生の気質も随分変わってきた気がします。教育システムの変化に加え、科学技術の発達によって日常生活が一変してきたことにも起因していると思います。便利で情報過多の世の中になり、自分で発想する機会や工夫する機会が失われていくとともに、地道な勉強が疎まれる傾向になっている気がします。教育のやり方は正解のない課題で、時代背景や個人差によってその都度工夫が必要だと思えます。多くの教員はその点を理解し、個々の努力を積み重ね、その結果、これまで社会で活躍するユニークな人材を多数輩出しています。これからもその努力が継続されることで、より一層北大のステータスが上がることを期待します。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和29年1月29日
- 昭和51年3月 北海道大学理学部卒業
- 昭和53年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
- 昭和56年9月 北海道大学大学院理学研究科博士課程修了
- 昭和56年9月 理学博士（北海道大学）
- 昭和56年9月 米国ノースウェスタン大学化学科博士研究員
- 昭和59年8月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助手
- 平成4年4月 北海道大学理学部助教授
- 平成5年8月 北海道大学理学部教授
- 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
- 平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授
- 平成19年4月 } 北海道大学大学院理学研究院副研究院長
- 平成26年3月 }
- 平成22年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
- 平成26年3月 }

農学研究院教授

はら ひろし
原 博 氏



昭和62年、真冬の北海道大学に助手として赴任してきました。約8年間東京の企業に在職していましたが、とあるきっかけで札幌に来て30年以上が経ちました。当時の農芸化学科の先生方には、北大に全く縁が無かった私を気持ちよく迎え入れていただき、とても感謝しております。私の所属する食品栄養学研究室は、当時桐山修八教授が主宰されており、実験動物であるラットを使った栄養実験が本格稼働し始めていました。研究室には葛西隆則先生と知地英征先生がおられ、勝手に分からない私を気遣ってたくさん話をしていただきました。また、在席していた学部4年生にも仲良くしていただきました。

企業ではペプチド吸収の基礎と実用化研究をしていましたが、桐山先生は食物繊維研究で名を知られており、相談してこの食物繊維の研究に参画させていただきました。しばらくして、研究室のもう一つ大きなテーマであった難消化性ペプチド研究も（研究を、だったかも・・・）やれと言われ、結局両方並行してずっとやってきました。研究遂行のためラットを使った無麻酔無拘束条件での実験手技を多く開発しました。かなりマニアックなものでしたが、その後の消化管研究の基礎となり、またたくさんの学生さんのおかげで、多くの論文も出せました。感謝しております。まだ少しの間、北大でお世話になりますのでどうぞよろしく願いいたします。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和28年7月23日
- 昭和51年3月 東京農工大学農学部卒業
- 昭和53年3月 名古屋大学大学院農学研究科博士前期課程修了
- 昭和62年1月 北海道大学農学部助手
- 平成4年9月 博士（農学）（北海道大学）
- 平成6年8月 北海道大学農学部助教授
- 平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科助教授
- 平成15年4月 北海道大学大学院農学研究科教授
- 平成18年4月 北海道大学大学院農学研究科教授

農学研究院教授

こいけ たかよし
小池 孝良 氏

平成10年4月に農学部附属演習林の改組を進めておられた石城謙吉林長にお招きいただき、丹保憲仁学長の下で明治34年に開設した施設の組織替えに参加しました。その開設100周年記念を多数の職員と共に祝うことができました。新設の北方森林保全学講座では、世界各地から集まった学生さんと研究に取り組みました。その後、平成18年農学研究科の2度目の審査を経て造林学研究室へ配置換えになりました。私は林業試験場時代から変動環境下での樹木の光合成機能の研究に従事してきました。一方、最も長く講義の機会をいただいたのは森林昆虫を基礎にした森林保護学でした。農学部では哲学のような森林美学の講義と自らの専門との接点は、国連の提唱する生態系サービスの概念に拠り所を見つけたように思います。そして、新天地での新しい体系を構築された新島善直教授とその門下生の足跡を学び、神の下の平等を護るために命をかけた生き方を知らしめた多くの先人達からの学問のバトンを受け取り、繋ぐことの重みを日々実感する毎日でした。

山造りは「木一代・人三代」の言葉通りであり、それは総合林学とも言うべき森林美学に示されていると感じています。ありがとうございました。

今後は最長2年間、特任教員として勤務させていただきます。よろしくお願いいたします。

略 歴

生年月日	昭和28年6月20日
昭和53年3月	京都府立大学農学部卒業
昭和56年3月	名古屋大学大学院農学研究科博士後期課程中退
昭和56年4月	林業試験場北海道支場
昭和63年9月	
昭和62年12月	農学博士（名古屋大学）
昭和63年10月	森林総合研究所北海道支所
平成6年10月	東京農工大学農学部助教授
平成10年4月	北海道大学農学部附属演習林教授
平成13年4月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
平成18年4月	北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

かわむら しゅうそう
川村 周三 氏

昭和48年4月に北海道と農学部に通じて北海道大学に入学しました。農学部卒業後に大学院に進学し、そして農学部に教員として勤務し今日に至りました。北海道大学キャンパスの美しい四季の移り変わりを眺めつつ、44年を過ごしたことになります。

大学院時代にお米の研究に取り組み、教員になってからは、農畜産物の収穫以後の品質と鮮度を保持し、さらに向上させるための技術開発を研究テーマとしてきました。さらに、農畜産物や食品の品質を判定するための非破壊品質評価技術に取り組み、農畜産物や食品の品質を簡便に短時間に評価する技術の実用化を目指しました。また、農畜産物や食品の最終的な品質はヒトをパネルとした官能評価（食味評価）により判定されると考え、農畜産物や食品の理化学特性と食味評価について研究を行ってきました。その成果は、特に北海道米の収穫後の工程における品質食味の向上につながり、現在の北海道米の高い品質評価にわずかながら貢献できたと思っています。そのような成果を上げることができたのも、北海道大学という恵まれた環境のおかげであると感謝しております。

平成31年3月までは特任教員として勤務いたしますので、よろしくお願いいたします。

略 歴

生年月日	昭和29年3月3日
昭和53年3月	北海道大学農学部卒業
昭和55年3月	北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和58年3月	北海道大学農学部助手
昭和61年3月	北海道大学大学院農学研究科博士課程修了
昭和61年3月	農学博士（北海道大学）
平成9年4月	北海道大学農学部助教授
平成11年4月	北海道大学大学院農学研究科助教授
平成18年4月	北海道大学大学院農学研究院助教授
平成19年4月	北海道大学大学院農学研究院准教授
平成25年4月	北海道大学大学院農学研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院
教授

ながい ゆうこ
長井 裕子 氏



北海道に生まれ育った私は、大学進学を機に当地を離れ、また縁あってこの地に戻り、北大で教鞭を執ることとなった。生来口下手で、教壇に立つことに苦手意識はあったが、何とか務めを果たし、無事定年の日を迎えることができたのは、学生諸君の熱意、同僚教職員の励ましのおかげである。

来し方を振り返れば、私の着任当時、担当科目の中国語は第2外国語でさえなく、専任教員もお二人しかおられなかった。しかし、中国が国際社会で存在感を増すにつれ、学生のまなざしも隣国に向けられるようになり、中国語スタッフの陣容も充実していった。この点、本学の基本理念「国際性の涵養」の一翼を担う者として、喜ばしい限りであった。また、中国と日本の交流が多方面で盛んになったことで、留学生も増加し、大学院ゼミの受講生が、ほぼ中国人留学生によって占められるという思いがけない事態にも直面した。私は中国文化研究を専門としており、「中国人に中国文化を講義する」ことに気後れしつつも、留学生から中国文化の多様性を再認識させてもらうこともしばしばであった。

様々な思い出が織りなす北大での学究生活に名残は尽きない。これまで支えてくださった皆様にお礼を申し上げるとともに、北大の益々の発展を祈念してやまない。

略 歴

昭和53年 3月 東京外国語大学外国語学部中国語学科卒業
 昭和55年 3月 京都大学大学院文学研究科中国語中国文学専攻修士課程修了
 昭和55年 6月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退
 昭和55年 7月 京都大学人文科学研究所助手
 平成2年 4月 山梨県立女子短期大学助教授
 平成5年 4月 北海道大学言語文化部助教授
 平成14年 6月 北海道大学言語文化部教授
 平成19年 4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

保健科学研究院教授

よしむら さだこ
良村 貞子 氏



国立大学法人へ移行した平成16年に着任し、同年に保健学科の教育が始まりました。大学院の設置申請時には看護学コースの責任者として、夜遅くまで書類作成の日々が続きました。平成20年には保健科学院が創設され修士課程が、平成22年に博士後期課程がスタートし、安堵しました。その後、副学院長として大学院教育の管理運営に努めました。

短大時代に助産学の教員を14年経験しましたが、現在は修士課程で助産師を養成しています。科学・技術の進歩と相まって、高度化する保健・医療・福祉分野でリーダーシップを発揮できる保健師・助産師・看護師の人材育成には、修士課程以上での実習を含めた教育が必要と考えます。本年に保健科学院の修士課程及び博士後期課程の入学定員が増えたことは大変嬉しく思っています。

留学生も増え、解決困難な課題の多い現代ですが、国際社会で活躍できる有為の人材育成に若干は貢献できたのではないかと考えています。学生時代から長い月日を北大のキャンパスで過ごす機会を得ました。助産師・看護師として勤務した北大病院、看護学教員として在籍した保健科学研究院のますますの発展を祈念しています。

略 歴

昭和51年 3月 北海道大学医学部附属看護学校卒業
 昭和52年 3月 北海道大学医学部附属助産婦学校卒業
 昭和52年 4月 北海道大学医学部附属病院看護部看護婦
 昭和52年 7月 北海道大学医学部附属病院看護部助産婦
 昭和57年 3月 北海道立衛生学院保健婦科卒業
 昭和57年 4月 北海道大学歯学部附属病院看護部看護婦
 昭和60年 4月 北海道大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻助手
 平成3年 8月 北海道大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻講師
 平成6年 8月 北海道大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻助教授
 平成8年 3月 北海学園大学大学院法学研究科博士課程修了
 平成8年 3月 博士（法学）（北海学園大学）
 平成11年 4月 旭川医科大学医学部看護学科教授
 平成16年 4月 北海道大学医学部保健学科教授
 平成20年 4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院教授

いのうえ かおる
井上 馨 氏

私は大学ではデザインを学び、その中で生理人類学を基盤とした人間工学を専攻しました。大学院を卒業した後、幸運にも北海道大学医学部解剖学教室に助手として採用していただきました。この研究室のテーマは神経解剖で、私もミュータントマウスを用いた神経伝導路の形態発生という仕事に参加させていただきました。解剖学教室の大きな仕事は解剖学実習です。私は解剖学実習の第一歩から教えていただき、解剖学実習の指導は現在まで続けています。

その後、医療技術短期大学部へ解剖学の担当者として赴任しました。所属は作業療法学科でしたが、当時は作業療法というのが何なのか殆ど知りませんでした。しかし、実際見聞きしてみると、作業療法はおもしろい分野で、これから大きく発展する可能性があると感じました。研究面では遺伝子改変マウスを用いた緑内障の研究、また生理人類学のテーマの一つである生理的多型性を用いた研究も行いました。生理的多型性は作業療法にも関係するユニバーサルデザインの基盤になるものと考えています。これには40年も前に学んだデザインの考え方が役立ちました。よく「人生には無駄なことは何も無い」といわれることがありますが、この時それを実感した次第です。

略 歴

生 年 月 日	昭和28年 5月 1日
昭和53年 3月	九州芸術工科大学芸術工学部卒業
昭和55年 3月	九州芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程修了
昭和55年 5月	北海道大学医学部助手
平成 2年 6月	医学博士（北海道大学）
平成 5年 4月	北海道大学医学部講師
平成 8年 4月	北海道大学医学部助教授
平成11年 4月	北海道大学医療技術短期大学部教授
平成15年 4月	北海道大学医学部教授
平成20年 4月	北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院教授

ちば ひとし
千葉 仁志 氏

北大教職員の皆様に、退職のご挨拶申し上げます。

北大卒業後に第二内科に入局し、最初に原発性アルドステロン症という病気に出会ったことが、長い北大での脂質研究の始まりでした。この病気の診断に役立つステロイドの合成と分析のために、北大薬学部から行かれていた東日本学園大学（現 北海道医療大学）薬学部の藤間貞彦教授、黒澤隆夫講師（現 同大副学長）の研究室に入門しました。研究がまとまった後も分析を続けたくて、悩むこともなく臨床検査の世界に移りました。北大病院検査部では感染管理室の立ち上げ、ISO15189（検査室の国際規格）の全国初の認定取得に参加しました。いずれも多くの方々の努力で成し遂げられて現在に至っています。新設の医学部保健学科に移ってからは、臨床検査教育に従事しながら、保健科学研究院・学院、健康科学分野、そして健康イノベーションセンター・高度脂質分析ラボ部門の立ち上げに関わりました。若い日に憧れた合成と分析を駆使した脂質研究の環境が、周囲のご理解とご協力によって漸く整いました。ここまでに研究生活30余年を費やしてしまいましたが、研究室の同僚や学生がこれからここで優れた研究を展開してくれるのが楽しみです。

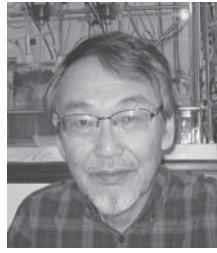
最後になりましたが、大変にお世話になりました北大の教職員の皆様に深く感謝いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和28年 7月 23日
昭和56年 3月	北海道大学医学部医学科卒業
昭和56年 6月	北海道大学医学部附属病院医員
昭和56年10月	伊達赤十字病院
昭和58年 1月	北海道大学医学部附属病院医員
昭和62年 9月	北海道大学医学部助手
平成 3年12月	北海道大学医学部附属病院講師
平成 3年12月	北海道大学医学部附属病院検査部副部長
平成 6年 6月	博士（医学）（北海道大学）
平成17年 4月	北海道大学医学部教授
平成17年10月	北海道大学病院検査部長
平成20年 4月	北海道大学大学院保健科学研究院教授
平成20年 4月	北海道大学大学院保健科学研究院副研究院長
平成24年 3月	

工学研究院教授

たかはし まさひろ
高橋 正宏 氏



私は、北大衛生工学専攻を昭和53年に修了してから、平成17年に北大に戻るまで、4年程行政に関わりましたが、それ以外は建設省、国土交通省の研究所で、下水処理の研究を続けてきました。実際の下水処理場が主戦場だったので、地方自治体の現場のベテランや、民間企業の熟練技術者から、たくさんのことを学ばせてもらいました。

北大に来て、今度は技術的にはまっさらな学生に環境問題の奥深さを考えてもらうきっかけを与えなくてはなりません。27年間、国の技術者として日本各地や世界で経験した様々な環境問題を学生にできるだけ伝えるように心がけましたが、うまく伝わったかは自信が持てません。私が最初の頃に指導した学生は、今、社会の中堅としてそれぞれの持ち場を支えようとしている年頃です。彼らの活躍を期待しております。

今、世界は経済成長の停滞、反グローバリズムやポピュリズムの台頭など、きな臭い状況を見せています。おかしな潮流に国民が流されてしまえば、また先の大戦のような悲惨な状況に陥るかもしれません。自分の頭で考え、孤立を恐れない強い自我を、この北大の地で鍛え上げてくださるようお願いいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年11月21日
 昭和51年 3月 北海道大学工学部卒業
 昭和53年 3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和53年 4月 } 建設省土木研究所研究員
 平成 8年 3月 }
 平成 8年 3月 博士（工学）（北海道大学）
 平成 8年 4月 } 滋賀県土木部課長
 平成10年 6月 }
 平成10年 6月 建設省建設技官
 平成10年 6月 } 日本下水道事業団大阪支社次長
 平成12年 7月 }
 平成12年 7月 建設省土木研究所研究員
 平成13年 4月 国土交通省国土技術政策総合研究所研究官
 平成16年 4月 国土交通省国土技術政策総合研究所研究部長
 平成17年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

う かい しげはる
鵜飼 重治 氏



国の研究開発機関で最初の10年間はウラン・プルトニウム混合酸化物燃料の照射研究、その後の17年間はステンレス鋼の照射効果研究や酸化物分散強化型（ODS）フェライト鋼の開発に従事した後、北海道大学に移り、11年が経ちました。国の機関ではプロジェクト開発で研究への制約が大きかったので、大学では自分で納得できるまで、とことん研究したいと思いました。大学の研究室で実験できるODS合金の研究を中心に据え、たっぷりある自分の時間でODS合金についても一度基礎に返って深く考えました。幸い、これまで科研費を切れ目なく獲得し、学生達と研究を進める中で、ワクワクするような新しい現象、発見にも巡り会えました。そんな中で、平成23年3月11日に福島第一原子力発電所の事故が起きてしまいました。二度このような悲惨な事故を起こさないため、自分で貢献できることを考えて申請した事故耐性ODS鋼被覆管開発の大型プロジェクトが文部科学省公募に採択され、さらにその実用化技術開発が経済産業省資源エネルギー庁プロジェクトとして進行中です。

このようにして、北大での11年間は全く夢のように過ぎ去っていきました。しかし、研究意欲は益々盛んです。特任教員として後に残された2年間、これまで育んだODS合金の芽をしっかりと実らせたいと考えています。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 3月26日
 昭和52年 3月 東北大学工学部卒業
 昭和54年 3月 東北大学大学院工学研究科博士前期課程修了
 昭和54年 4月 動力炉・核燃料開発事業団
 平成 2年 2月 博士（工学）（九州大学）
 平成10年10月 核燃料サイクル開発機構
 平成17年10月 日本原子力研究開発機構
 平成18年 5月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

おかだ しげゆき
岡田 成幸 氏

昭和54年、博士後期課程を中途退学して助手に採用されて以来、現今では稀少の大学畑一筋の38年間の教員生活に一区切りを付けることとなりました。緑豊かな北海道に生まれ、北海道で育ち、途中思うところがあり、名古屋に異動しました。専門の地震防災計画を、社会活動に力を入れた東海圏で学び直そうと思い立ったからでした。

離道して気がついたのは、日本文化の多様性に比べ大学教育の質が均一であることでした。大学生は日本中どこでも、気質は別としても、その理解力・能力において差はないと感じました。社会に出ると前者の気質が問われることにはなるのですが、日本の教育の質の高さは均一的に保障されていると納得する反面、サイドの「知識人とは何か（平凡社ライブラリー）」の言葉が重くのし掛かってきました。「知識人（intellectual）は狭い知の領域に閉じ込めりがちで、専門の外にあるものを見ようとせず（これを専門分化（specialization）という）、特定の権威なり規範的思考方に迎合する（これを専門主義（professionalism）という）恐れがある」という指摘です。私が感じていた日本の教育の質の高さは専門性にありました。一般教養を犠牲にせず憂慮や愛着によって動機付けられる広い視野と関心、これがサイドのいうアマチュア主義であり、逆説的ではありますが、自分の専門領域をより広く深く進化させる原点であると思います。最後に、サイドの言葉を再び。

「現代の知識人はアマチュアたるべきである。」

略 歴

生年月日 昭和28年4月14日
 昭和51年3月 北海道大学工学部卒業
 昭和53年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和54年3月 北海道大学大学院工学研究科博士後期課程中途退学
 昭和54年4月 北海道大学工学部助手
 昭和62年12月 工学博士（北海道大学）
 平成2年6月 北海道大学工学部助教授
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
 平成16年10月 名古屋工業大学大学院工学研究科教授
 平成20年4月 } 東北大学客員教授
 平成29年3月 }
 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授
 平成24年4月 } 北海道地区自然災害科学資料センター長
 平成27年3月 }
 平成27年4月 } 京都大学防災研究所自然災害研究協議会北海道地区部会長
 平成29年3月 }

工学研究院教授

まつうら きよたか
松浦 清隆 氏

北大理類の入学試験を受けるため兵庫県から初めて北海道に来て以来、これまでの人生の大半を札幌及びその近郊で暮らしてきました。学部3年生の時に故郷の高校の1年後輩の女性と結婚して、在学中に2人の子が生まれ、助手になってからさらに2人の子に恵まれ、その4人の子供たちも皆20代前半で結婚したので、私に初孫が生まれたのは40代後半で、還暦の頃には11人の孫に囲まれる総勢21名の大家族になりました。

故郷から遠く離れた北海道で世間知らずの若い夫婦が2人きりで始めた生活が、こんなに大きな家族となって花開いたことを改めて思い返すと、これまで様々な苦勞を味わいましたが、今では報われた感があります。何かの時に頼れる親や親戚は遠く離れた故郷にいたため、日々の苦勞は2人で支え合うしか術がないような環境に長く置かれてきたので、夫婦や家族の絆はとても強いものになったように思われます。また、特に学生時代は、当時住んでいた郊外の町内の方々や家庭教師をしていた家の方々に何かと大変お世話になったので、おかげ様で貧しい中でもたくさんの子供たちをどうにか育てることができました。北海道の人たちの温かい支えに助けられたと思い、深く感謝しています。

略 歴

昭和54年3月 北海道大学工学部卒業
 昭和56年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和56年4月 北海道大学工学部助手
 平成5年12月 博士（工学）（北海道大学）
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助手
 平成15年4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
 平成18年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

ちかひさ たけみ
久美 武美 氏



私がウィスコンシン大学で修士課程を修了した後、北大博士課程に復学して1年半ほど経った頃、突如恩師から2ヶ月以内に学位論文申請をする旨を告げられ、毎日大学に泊まり込みながら学位論文を仕上げました。この時の若さに溢れた頑張りは、今では懐かしい思い出です。以来35年間の教員生活が始まりました。

最初はディーゼル機関内の燃焼及びエミッション改善に従事し、「燃焼の相似則」という新概念を提唱しました。その後、所属する研究室の改編に伴い、エネルギーに関する新領域を切り開くこととなりました。そこで、再生可能エネルギーの研究をしたいと考えながら、研究人生を賭けるような発展的なテーマが見つからず、もがき苦しみました。そのうち、機械工学分野では珍しい「CO₂削減目標に対する長期的なシナリオ解析」を始めました。また、新教授が来られたことを契機として、「燃料電池研究」を開始しました。それ以来、この2つに「燃焼研究」を加えた3種類の研究が柱となっています。近年、地球温暖化による異常気象が頻発しており、地球の将来が危ぶまれています。残り2年間でこれまでの研究を集大成し、北海道における再生可能エネルギーをベースとした循環型社会づくりに、少しでも貢献したいと考えています。

最後に、北海道大学での教育研究生活に感謝するとともに、本学の更なる発展を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年1月11日
 昭和51年3月 北海道大学工学部卒業
 昭和53年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和54年12月 米国ウィスコンシン大学大学院修士課程修了
 昭和57年3月 北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了
 昭和57年3月 工学博士（北海道大学）
 昭和57年4月 北海道大学工学部講師
 昭和59年4月 北海道大学工学部助教授
 平成15年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成21年4月 } 北海道大学役員補佐
 平成24年3月 }
 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授
 平成24年4月 } 北海道大学大学院工学研究院副研究院長
 平成28年3月 }
 平成26年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
 平成28年3月 }

工学研究院教授

ふなみず なおゆき
船水 尚行 氏



私はここ20年以上、「サニテーション」に関する研究を行ってきている。「サニテーション」とは、「私たちの生活から否応なしに排出される『し尿』『排水』『廃棄物』をどのように扱うか」を指す。私は、これまでに日本・中国・インドネシア・ブルキナファソ・ザンビアでサニテーションのプロジェクトを行う機会を得てきた。そして、政治学・経済学・人類学・社会学・環境工学・農学を専門にする様々な国の人たちとビジョンを共有し、共に働くことができた。現在も、人間文化研究機構総合地球環境学研究所と北大の教授をクロスアポイントしている。これまでに作り上げた人のネットワークは多くの新しい融合を作り出してきたと認識している。また、超学際研究の重要性も実感することができた。私と一緒に働いてくれた世界の研究者に感謝したい。

退職後は、この4月に新たに開設される国際食資源学院の担当教員として、そして、総合地球環境学研究所の教授として引き続き、新しいフュージョンを生み出していく努力を続けていく所存である。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年8月25日
 昭和51年3月 北海道大学工学部卒業
 昭和53年3月 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
 昭和53年4月 北海道大学工学部助手
 昭和61年12月 工学博士（北海道大学）
 昭和62年4月 北海道大学工学部講師
 平成2年4月 北海道大学工学部助教授
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
 平成16年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授
 平成22年4月 } 北海道大学環境ナノ・バイオ工学研究センター長
 平成26年3月 }
 平成26年4月 } 北海道大学次世代都市代謝教育研究センター長
 平成27年3月 }
 平成28年8月 人間文化研究機構総合地球環境学研究所教授

公共政策学連携研究部附属公共政策学
研究センター教授

いしい よしはる
石井 吉春 氏



政府系金融機関の日本政策投資銀行を辞め、平成17年4月から実務家教員として公共政策大学院に勤務し、いつの間にか12年が経ち、この度、定年を迎えることになりました。この間、同僚にも恵まれ、300人を超える卒業生を送り出すことができた上に、地方創生の戦略づくりなど、道内自治体運営にも様々な場面で関わることができ、この職につけたことに心より感謝しています。

公共政策大学院は、専門職大学院として、様々な分野で活躍できる実務家養成を目指してきましたが、様々なキャリアを持つ教員が集まり、手探りで教育環境の整備を行ってきました。他にない特色として文理融合という方向を掲げてきましたが、教員も学生も文系・理系が入り混じるなかで、議論もなかなかかみ合わないところから始めて、ようやく、授業などで多少ともそうしたことを体現できるようになったのかなというところです。

今後、さらに特色のある大学院として発展していくことを、心より祈念していますし、引き続き、微力ながら、大学院の発展のためにできる協力は続けていきたいと考えています。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年1月17日
昭和51年3月 一橋大学商学部卒業
昭和51年4月 北海道東北開発公庫
平成11年10月 日本政策投資銀行
平成17年4月 北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成19年4月 北海道大学大学院公共政策学連携研究部附属
公共政策学研究センター教授
平成27年4月 北海道大学大学院公共政策学連携研究部長
平成29年3月 公共政策学教育部長

低温科学研究所教授

たなか あゆみ
田中 歩 氏



「金なし、暇なし、名誉なし」。これは、私が若い頃、周辺で流行っていた言葉です。これは現状を悲観したものではなく、若手研究者の可能性を表す言葉でした。失う名誉やしがらみもないので、どんな挑戦も許され、奇妙な意見も表明できたのです。言葉を変え、この「三無い」は精神の自由の大切さを示す言葉でした。私はこの言葉を大変気に入り、精神の自由を生涯の指針にしようと考えました。

ところが、若手研究者を卒業すると、この精神の自由を持ち続けることの難しさに気が付きました。世間の研究の流れとは違った仕事を続け、常に自分の見解を表明することは予想以上に難しいことでした。その時、友人の小保方潤一さんが「研究者はやせ我慢だ」と教えてくれました。この言葉に私はいたく感銘し、その後の座右の銘になりました。

とはいっても、やせ我慢をしながら精神の自由を実現するのは本当に難しい。悩んでいる間に気が付けば定年退職の時期が来てしまいました。そう言えば、4月からは特任教授だ。制約から解放され、今度こそ精神の自由を実現できるかもわからない。しかし、何の制約もないところに自由はあるのだろうか少し哲学的なことも考えてしまいます。研究者とは本当に難しいものだ。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年5月8日
昭和52年3月 京都大学理学部卒業
昭和54年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程植物学専攻修了
昭和57年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和57年5月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程植物学専攻修了
昭和57年5月 理学博士（京都大学）
昭和61年4月 京都大学研修員
昭和61年12月 京都大学理学部附属植物生態研究施設助手
平成3年4月 京都大学理学部助手
平成7年3月 京都大学理学部講師
平成7年4月 京都大学大学院理学研究科講師
平成10年4月 北海道大学低温科学研究所教授
平成23年4月 北海道大学低温科学研究所副所長
平成26年3月

総合博物館教授

たかはし ひでき
高橋 英樹 氏



農学部附属植物園と総合博物館で計36年勤務した。北大での全在職期間を学部以外の「周辺部」で過ごしたことになる。植物園の助手に採用された昭和56年、当時の大学附属施設の助手は施設生え抜き技術職員の最終職階だったので、大学院上がりの「若造」が来たと驚かれた。植物園時代には、米国国立樹木園やフィンランド大学植物園等による北海道植物調査のサポート役をして刺激を受けた。植物園技官の人たちと道内の種子採集調査をしたのも忘れ難い。そして平成11年に設置認可された総合博物館に異動した。

植物園・博物館時代には、東シベリア、千島列島、サハリン、そして北方四島など多数の夏期野外調査を経験させてもらった。これも「周辺部」にいた恩恵だったかもしれない。

総合博物館での活動は、植物標本庫の充実と展示活動だった。北大樺太研究・千島研究や、マキシモヴィッチ・宮部金吾・クラーク博士等の企画展示開催に関わらせてもらい、米国やロシアの研究機関・大学と協力できたのも思えば深い。

総合博物館は平成28年7月末にリニューアルオープン。北大の学部や研究施設等の展示が拡大し、キャンパスを訪れる方たちが目指すお立ち寄りスポットの一つとなっている。これからも「大学の顔」として、北大の教育・研究活動の発信地であり続けてほしい。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年10月17日
 昭和51年 3月 東北大学理学部卒業
 昭和53年 3月 東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了
 昭和56年 3月 東北大学大学院理学研究科博士後期課程修了
 昭和56年 3月 理学博士（東北大学）
 昭和56年 5月 北海道大学農学部附属植物園助手
 平成元年 5月 北海道大学農学部附属植物園助教授
 平成11年 4月 北海道大学総合博物館教授

歯学研究科准教授

こばやし くにひこ
小林 國彦 氏



北海道大学に入学して以来42年が過ぎました。北大を選んだ理由は、父が転勤族だったため、まだ住んだことがないところ、という単純なものでした。入学してみると大学の99期生であり、歯学部の9期生ということでした。伝統ある大学の新しい学部ということで、それぞれのいいところがある過ごしやすい環境でした。先輩たちはあまり高圧的ではなく、フランクに議論ができる、そういう校風があったと思います。

開業医になることを漠然と考え、その準備として第二補綴学講座に入局したのですが、いきなり助手となり、昨日まで学生だった身から、目が覚めると教官になっているという、今では考えられない時代でした。入局後は新米教官として、また研究者として忙しい毎を送りました。毎日夜中まで働く生活が続きましたが、仲間に恵まれ、楽しく仕事ことができました。16年前に高齢者歯科学教室に移りましたが、こちらでも良き先輩、後輩に恵まれました。そのおかげで、開業もせず、北海道に住み着いて、北海道大学の教員として定年を迎えることになりました。大学でしかできない歯科医療などいろいろやることができ、充実した大学生活だったと思います。支えてくださった先輩、後輩に心から感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和29年 3月14日
 昭和56年 3月 北海道大学歯学部歯学科卒業
 昭和56年 4月 北海道大学歯学部助手
 昭和61年11月 北海道大学歯学部附属病院講師
 平成 2年 3月 歯学博士（北海道大学）
 平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院講師
 平成16年 4月 北海道大学病院講師
 平成25年12月 北海道大学大学院歯学研究科准教授

水産科学研究院准教授

やました なりはる
山下 成治 氏



29歳で水産学部漁業学科の漁業機械学講座の助手に奉職してから34年が経ちます。この間、漁業現場で起こっている様々な問題について、学生や漁師ら、浜の関係者らと共に学んできました。特にその中で、人や組織は、どのような情報を用いて、どのような判断を下すのかについて、多くの事を学ばせていただきました。

このご縁でしょうか、4月から、道都にある大学の社会連携センターで、学生教育と地域振興のお手伝いをするようになりました。小集団においても、大きな協議会や国の諮問委員会などにおいても、意思決定の際には、バイアスを含む様々な統合化が起こります。形式的な合意の限界を超えて、多くのメンバーが満足できる方法について、また新しく、学生らと学びながら実践していく所存です。

激動する社会においてこそ、大学としての水産学部の役割はより大きくなります。皆様のお力が、社会的困難を超えるための原動力となることを確信しております。

私は道半ばで転進いたしますが、皆様のご健闘をお祈りして、退任の言葉に代えます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年9月3日
昭和54年3月 北海道大学水産学部卒業
昭和58年3月 北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻修士課程修了
昭和58年4月 北海道大学水産学部助手
平成6年3月 水産学博士（北海道大学）
平成7年4月 北海道大学水産学部講師
平成10年10月 北海道大学水産学部助教授
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成19年4月 北海道大学大学院水産科学研究院准教授

理学研究院准教授

おおしま ひろみつ
大島 弘光 氏



学部3年生の時に火山と出会い、火山研究を志し、一時期はやや外れたこともありましたが、昭和52年有珠山噴火を含めて道内で起こった3回の大きな噴火活動を経験しました。いずれも研究成果を残すことができず、苦い思い出だけが残っています。なかでも観測所が存続の危機に瀕し、研究を忘れ、内なる敵と戦いながら対応に追われた平成12年有珠山噴火の経験は、後に続く人に決して味わわせたくないものでした。その一方、他大学の研究者や文部科学省、事務局、地元自治体に助けられ、望んでも叶わないと思われた新観測所の建設に携わることができましたが、時の流れは観測所の存続を許さなくなったようです。

長期にわたって現地に滞在し、噴火で被災した人々や地域の苦悩と復興への知恵を垣間見て、漠然とした憤りとたくましさを感じ続けてきました。ようやくそれが何であったのかが分かり始め、これからのテーマとして取り組みたいと考えています。

教員としては、学生に「人は良いがガラは悪い」、意味不明な「大島語」を操ると言われている反面教師でしたが、野外観測を共にし、一緒に悩み、考え、問題を共有できた学生に出会えたことは大きな喜びです。常に新風をもたらし、時には鏡のように自分のいたらなさを映し出してくれた学生に支えられた教員生活でした。今は、多くの巣立った学生への感謝の気持ちで一杯です。

略 歴

生 年 月 日 昭和28年10月19日
昭和52年3月 北海道大学理学部卒業
昭和54年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和55年4月 北海道技術史員
平成元年4月 北海道大学理学部助手
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助手
平成10年3月 理学博士（北海道大学）
平成13年4月 北海道大学大学院理学研究科附属地震火山研究観測センター助教授
平成19年4月 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター准教授



平成17年に伊達市立伊達中学校で行った出前授業のレポートに描かれていた似顔絵

理学研究院准教授

いまがわ としあき
今川 敏明 氏



北海道大学へ赴任したのが平成4年11月1日、朝起きると前の晩から降った雪で北大構内は真っ白でした。そんな雪まみれの構内を歩いて理学部にやってきたことを今でも鮮明に覚えています。それから約25年、こんなに長く北海道大学にお世話になるとは思ってもいませんでした。その間、谷口和彌教授、坂口和靖教授のもとで研究・教育に専念することができ、大変充実した生活を送ることができたことを大変幸せに感じています。「実験が好きだけ」の私のようなものが、北大の研究・教育にどれほど貢献できたかは疑わしい限りですが、自分の好きな研究を思う存分自由に行うことができる環境を作ってくださった両先生の広いお心に感謝する次第です。平成6年からは、理学部RI施設の取扱主任者として安全管理に努めてきました。福島第一原子力発電所事故など、放射線施設に向けられる世間の眼は厳しく、安全管理には万全の体制で望まなければなりません。事故など問題を起こすことなく勤めを終えることができたのも、皆様のご協力があって初めてできたものと本当に感謝しています。

あと2年は、特任教員としてお世話になるつもりですので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

略 歴

生年月日 昭和28年7月25日
 昭和51年3月 大阪大学理学部卒業
 昭和53年3月 大阪大学大学院理学研究科前期課程修了
 昭和55年4月 大阪大学大学院理学研究科後期課程中退
 昭和55年4月 国立循環器病センター研究所厚生技官(研究員)
 昭和59年6月 理学博士(大阪大学)
 平成3年4月 国立循環器病センター研究所筋制御研究室長
 平成4年11月 北海道大学理学部助手
 平成5年4月 北海道大学理学部講師
 平成6年4月 北海道大学理学部助教授
 平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
 平成18年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院助教授
 平成19年4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院准教授
 平成22年4月 北海道大学大学院理学研究院准教授

北方生物圏フィールド科学センター
准教授

かどまつ まさひこ
門松 昌彦 氏



私の携わって来た試験研究では、複数の樹種の産地や個体間の成長・生育の違い等を明らかにしてきました。具体的には、産地試験地の設定や既存試験地の継続調査などです。長寿の樹木が対象であるため、それには数十年という時間を要します。また、決して一人では為し得ない研究でもあります。身を置かせていただいた研究林(旧演習林)には幸いにも組織力があり、その力を試験地の設定・維持管理・調査に発揮していただきました。

成果の数々はひとえに非常勤職員を含む研究林教職員のご理解とご協力・ご支援の賜物であり、心から感謝しております。また、学内外の研究者と連携を組むことができたことも、私にとって大変幸せなことでした。皆様方に改めて深謝いたします。

略 歴

昭和51年3月 鹿児島大学農学部林学科卒業
 昭和53年3月 北海道大学大学院農学研究科林学専攻修士課程修了
 昭和57年9月 北海道大学大学院農学研究科林学専攻博士課程修了
 昭和57年9月 農学博士(北海道大学)
 昭和57年10月 北海道大学農学部附属演習林助手
 平成11年4月 北海道大学農学部附属演習林助教授
 平成13年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教授
 平成19年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授

附属図書館事務部長

とみた けんいち
富田 健市 氏

北海道大学には、学生として4年、職員として9年お世話になりました。昭和57年に附属図書館に採用された際、最初の主な担当は電動タイプライターで目録カードを作成することでした。図書業務の電算化は外国雑誌の一括契約だけで行われていましたが、やがて全体に拡大し、今では目録カードそのものを見ることもほぼ無くなりました。自分自身も業務電算化を契機に、システム担当の深みにはまることとなり、北大を一度離れた後も、他の大学図書館等でほぼそのまま過ごしました。

今回は26年ぶりに北大に戻ってきたのですが、四半世紀を経過して電算化は更に進行しています。以前は図書や雑誌がどこに所蔵されているかを確認し借りることができるというのがシステム化の成果でしたが、電子書籍や電子ジャーナルであれば、来館することなく本文まで利用できるようになり、図書館自身も機関リポジトリ（北大ではHUSCAP）で北大の研究成果を世界に発信する支援をしています。さらに最近では、研究データの公開についても積極的な取り組みが求められるようになってきました。

今後の北海道大学のますますの発展と、図書館がそれを支援していける存在であり続けることを期待しています。長い間、ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 5月10日
昭和55年 3月	北海道大学文学部卒業
昭和57年 4月	北海道大学
昭和63年 4月	京都大学
平成 3年 4月	国際日本文化研究センター情報管理施設資料課文献資料係長
平成 6年 4月	京都大学図書館情報管理課システム管理掛長
平成 9年 4月	学術情報センター目録情報課専門員
平成12年 4月	国立情報学研究所国際・研究協力部成果普及課課長補佐
平成14年 4月	長岡技術科学大学図書課長
平成16年 7月	筑波大学附属図書館情報サービス課長
平成18年 4月	筑波大学附属図書館情報管理課長
平成20年 4月	東京工業大学学術情報部情報図書館課長
平成20年 7月	東京工業大学研究情報部情報図書館課長
平成22年 7月	東京工業大学研究推進部情報図書館課長
平成23年 4月	岡山大学附属図書館事務部長
平成26年 4月	北海道大学附属図書館事務部長

工学系事務部長

た や つかさ
多谷 司 氏

昭和50年当時、旧文部省の事務官として北海道大学に奉職しました。それから約42年もの歳月が流れたことに大きな驚きを感じています。その間、事務局に通算で約27年余り勤務し、北海道大学が激しい時代の移り変わりの中で、それらに適切に対応するため、数多くの変革を成し遂げてきたことを目の当たりにしてきました。

国立大学にとって「未曾有の大改革」と言われた、平成16年4月の法人化に向けた3年間に及ぶ移行作業が特に印象に残っています。今後も北海道大学のために少しでもお役に立てるよう、引き続き微力を尽くしてまいります。

これまで支えていただいた沢山の後輩職員に対し、改めて感謝を申し上げるとともに、益々のご活躍を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年11月 3日
昭和50年 6月	北海道大学教養部
昭和53年 8月	北海道大学庶務部人事課
昭和56年 4月	文部省大臣官房人事課（併）
昭和57年 3月	
昭和62年 4月	北海道大学工学部
平成元年 5月	北海道大学医学部
平成 3年 4月	北海道大学庶務部人事課
平成 9年 4月	小樽商科大学庶務課職員係長
平成11年 4月	小樽商科大学庶務課人事係長
平成12年 9月	北海道大学総務部人事課能率掛長
平成13年 4月	北海道大学総務部企画室専門職員（法人課調査担当）
平成14年 8月	北海道大学法人移行準備事務室（組織・運営担当）
平成16年 4月	北海道大学企画部企画調整課企画調整係長
平成16年 7月	北海道大学総務部総務課総務係長
平成17年 4月	（兼）北海道大学総務部総務課専門員
平成19年 4月	北海道大学総務部総務課課長補佐
平成20年 4月	北海道大学総務部職員課長
平成21年 4月	小樽商科大学総務課長
平成23年 4月	北海道大学研究推進部研究企画・推進課長
平成24年 4月	北海道大学研究推進部研究振興企画課長
平成25年 4月	（兼）北海道大学研究推進部次長
平成26年 4月	北海道大学総務企画部次長
平成27年 4月	北海道大学工学系事務部長

北海道大学病院総務課長

おおいし かずひろ
大石 和博 氏



私は、昭和31年9月に北海道大学医学部附属病院（当時）で産湯を使い、昭和62年に北海道教育大学に採用後、釧路工業高等専門学校、小樽商科大学、室蘭工業大学、旭川医科大学に転任、最後の勤務地である北海道大学では、縁あってか、出生した北海道大学病院で勤務させていただきました。

30歳での中途採用後、財務系、施設系、学務系、総務系など、いろいろな仕事を経験し、多くの方々にご指導、ご支援をいただき無事に定年を迎えることになりました。

また、旭川医科大学と北海道大学での4年間の病院勤務では、見るもの聞くもの初めてのことで戸惑うばかりでしたが、最後の年に病院の国際化推進に資することを目的とした事務職員、メディカルスタッフのための「国立大学附属病院海外実務研修（主催：国立大学附属病院長会議）」の企画や、研修本番の事務サポートとして台湾出張の機会を得るなど、多くの経験をさせていただき、ただただ感謝するばかりです。

最後に、北海道大学が今後益々発展されることを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。お世話になり、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年9月6日
昭和62年1月	北海道教育大学
平成12年4月	国立大雪青年の家庶務課会計係長
平成15年4月	北海道教育大学経理部主計課管財係長
平成16年4月	北海道教育大学財務部財務課専門職
平成17年4月	北海道教育大学財務部施設課主査
平成18年7月	北海道教育大学財務部情報化推進室主査
平成19年4月	釧路工業高等専門学校総務課長
平成21年4月	小樽商科大学学務課長
平成23年4月	室蘭工業大学総務グループマネジャー （兼）企画・評価室ユニットマネジャー
平成25年4月	旭川医科大学総務部総務課長
平成27年4月	北海道大学病院総務課長

文学研究科・文学部事務長

わたなべ まさあき
渡邊 正明 氏



3月末でいよいよ退職です。記憶力は衰え、人の名前を覚えることは諦めましたが、美瑛・東京間（1,186.1km）、超勤単価（×0.006555944）、会計法29条の3第4項前段など、若い時に憶えたことは忘れていません。

国立大雪青年の家から異動してきた昭和57年には、西5丁目通りに函館本線を跨ぐ陸橋があり、札幌駅北口には北海道拓殖銀行と八重洲ホテルしかなく、時の流れを感じます。

財務部に長くお世話になりました。若い時の病院勤務では業務量が多く大変でしたが、深夜に先輩がすすきのに連れて行ってくれるなど楽しい思い出しかありません。医学部ではスポーツ三昧の日々を過ごしました。

地方へは3度行きました。室蘭の理学部附属海藻研究施設では、日々違う顔を見せる海を事務室の窓から眺め、釧路では、地霧（ぢり）に驚き、製紙工場と魚かす工場の臭いに苦しめられました。旭川では、厳寒生活を懐かしむことができたが、水落しの煩わしさに閉口しました。

事務長として薬学部と文学部を経験しましたが、理系と文系の教員組織、社会での立ち位置・評価の違い等に驚きました。学問分野、歴史の違いなのでしょう。しかし自然科学と人文社会科学は車の両輪であり、社会現象や社会問題を調査・解析・評価・批判するには双方の知識・能力が不可欠で、そのような人材育成が大学の本務の一つだと思います。

就職して40余年、何とかやってこられたのは、良き先輩、良くない先輩、仲良き同僚、優秀な後輩のおかげであり、心から感謝します。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年8月9日
昭和50年4月	国立大雪青年の家
昭和57年5月	北海道大学
平成10年4月	釧路工業高等専門学校学生課学生係長
平成13年4月	北海道大学経理部第一契約課専門職員
平成16年4月	北海道大学財務部経理課財務管理掛長
平成18年1月	旭川医科大学総務部会計課課長補佐
平成20年4月	北海道大学財務部主計課財務管理室室長補佐
平成22年4月	監査室長
平成25年4月	薬学事務部事務長
平成27年4月	文学研究科・文学部事務長

獣医学研究科・獣医学部事務長

にしむら のぶき
西村 信毅 氏

旭川工業高等専門学校から本学に転任となり、その後、室蘭工業大学での6年間の勤務を経まして、このたび定年退職を迎えることになりました。その間、人事、総務、入試、情報など様々な分野の職場を経験させていただきましたが、幸せなことに、そのつど諸先輩、同僚、後輩の皆様にも恵まれ、ご指導、ご支援をいただきながら業務を担当していた思いが強くなります。この場をお借りしまして、関係していただいた皆様に心から感謝申し上げます。しかし、逆の立場として自分自身が支援できていたのかと問われますと、もっと出来ることがあったのではないかと思います、今となっては大変心残りです。

最後になりましたが、美しい自然環境に恵まれたキャンパスで勤務させていただいたことに感謝するとともに、北海道大学の益々の発展と皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年10月17日
昭和50年 8 月 旭川工業高等専門学校
昭和60年 7 月 北海道大学
平成 9 年 4 月 室蘭工業大学庶務課職員係長
平成11年 4 月 室蘭工業大学庶務課庶務係長
平成12年 4 月 北海道大学遺伝子病制御研究所庶務掛長
平成14年 4 月 北海道大学総務部人事課能率掛長
平成15年 4 月 北海道大学総務部人事課情報掛長
平成16年 4 月 北海道大学総務部人事課統一試験掛長
平成17年 4 月 室蘭工業大学総務課課長補佐
平成20年 4 月 北海道大学総務部総務課課長補佐
平成22年 4 月 北海道大学教育学事務部事務長
平成24年 4 月 北海道大学法学研究科・法学部事務長
平成27年 4 月 北海道大学獣医学研究科・獣医学部事務長

メディア・観光学事務部事務長

うえにし いさお
植西 勇夫 氏

昭和50年4月に創設もない旭川医科大学に採用され、21年間勤務した後、本学に転任となり、その後の北見工業大学での勤務を含め42年間の勤務を経て、このたび定年を迎えることとなりました。

この間、それぞれの職場において、様々な仕事に携わり多くの方々との出会いがあり、意義深い日々を過ごすことができましたことは、ひとえに多くの良き先輩、同僚、後輩、並びに先生方の公私にわたる温かいご指導とご支援の賜と深く感謝し、心から厚くお礼申し上げます。

国立大学法人を取り巻く環境は一層厳しい状況が続くと思いますが、北海道大学が地域に愛され、世界に輝く大学として益々発展し続けることを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年 6 月25日
昭和50年 3 月 北海道士別高等学校卒業
昭和50年 4 月 旭川医科大学庶務課
昭和51年 4 月 旭川医科大学総務部庶務課
昭和61年 4 月 旭川医科大学総務部会計課
昭和63年 4 月 旭川医科大学総務部庶務課
平成 8 年 4 月 北海道大学工学部総務課
平成10年 4 月 北見工業大学庶務課職員係長
平成12年 4 月 北海道大学農学研究科・農学部専門職員
平成15年 4 月 北海道大学総務部人事課能率掛長
平成16年 4 月 北海道大学総務部職員課専門職員
平成18年 4 月 北海道大学総務部職員課職員厚生係長
平成19年 4 月 北海道大学総務部職員課係長
平成20年 4 月 北海道大学総務部職員課課長補佐
平成22年 4 月 北海道大学総務部総務課課長補佐
平成23年 4 月 北海道大学工学系事務部総務課長
平成26年 4 月 北海道大学メディア・観光学事務部事務長

北方生物圏フィールド科学センター
事務長

やまもと まさゆき
山本 正幸 氏



私が北海道大学にお世話になるようになったのは、昭和50年5月20日です。最初に手にしたのは、給与ではなく夏の期末勤勉手当でした。また、人事院勧告による給与の改定が大きく、時には差額が期末勤勉手当より多いこともあったような気がします。そのような中採用された当時の私は、右も左も解らない程純粹であったものでした（今は誰にも信じてもらえませんが）。当時の病院の諸先輩から仕事は勿論、遊びや社会勉強(?)を教わりました。ここが私の出発点であります。当時の病院の仕事は、一生かけても追求したいほど面白いものでした。途中、医事業務の電算化があり、いち早くコンピューターの環境を味わえたのも、今となればラッキーでした。一般的に病院経験者は、病院経験が長くなると言われていますが、ご多分に漏れず病院スパイラルを見事経験しました。

しかし、中でも最後の職場として、地方勤務を2回経験した私が、北方生物圏フィールド科学センターに志願し勤務できたことが、大変喜ばしいものでした。地方のことを知り、工夫をすることで色々な成果が期待できる、こんな面白い施設は、他に無いと思います。やりたいことは沢山ありましたが、2年間で完結はできませんでした。少し悔いが残ります。次の事務長に期待しつつ、後ろ髪を引かれる思いで退職します。

最後になりましたが、無事ここに退職できるのは、諸先輩及び皆様の支えがあつてのものです。今後の皆様のご活躍を期待しております。長い間お世話になりました。

略 歴

生年月日 昭和31年5月27日
 昭和50年3月 北海道砂川北高等学校卒業
 昭和50年5月 北海道大学医学部附属病院医事課
 昭和57年5月 北海道大学教育学部
 昭和59年5月 北海道大学獣医学部
 昭和62年5月 北海道大学農学部
 平成2年4月 北海道大学医学部附属病院管理課
 平成4年4月 北海道大学農学部附属演習林中川地方演習林事務掛会計主任
 平成7年4月 北海道大学医学部附属病院管理課管理掛会計監査主任
 平成10年4月 北海道大学理学部附属臨海実験所事務掛長
 平成12年4月 北海道大学理学研究科・理学部附属臨海実験所事務掛長
 平成13年4月 北海道大学経理部第二契約課第二契約掛長
 平成15年4月 北海道大学医学部附属病院管理課専門職員
 平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院管理課経営企画掛長
 平成16年4月 北海道大学病院管理課専門職員
 平成17年10月 北海道大学病院経営企画課予算管理係長
 平成18年4月 北海道大学病院経営企画課財務係長
 平成19年4月 旭川医科大学病院事務部経営企画課課長補佐
 平成20年4月 旭川医科大学総務部会計課課長補佐
 平成21年4月 北海道大学病院経営企画課課長補佐
 平成24年4月 北海道大学工学系事務部経理課長
 平成27年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター事務長

■レクリエーション

平成28年度 北大山岳会事業登山記録

北大山岳会は昭和26年、北大職員レクリエーション団体活動の一環として、山岳またはスキー愛好の有志を以って組織された歴史と伝統ある親睦団体です。春から秋を中心に年5～6回、日帰りで道内の山を登っています。今年度は太田山神社（5月28日）、大雪山・旭岳（8月27日）、積丹岳（9月17日）、オロフレ山（10月15日）の4回の事業登山を実施しました。その中から天候に恵まれた太田山神社と大雪山・旭岳の山行を報告します。

太田山神社 5月28日（土）

太田山神社は久遠郡せたな町にあり、北海道で一番西に位置する神社です。神社の本殿は日本海に面した絶壁の中腹にあり、参拝には鉄梯子や鎖場の登下降が必要になり、日本一危険な神社と評判になっています。

登山口には立派な鳥居が建っており、鳥居をくぐると急な石段となっています。安全のためロープが張ってあり、これにしがみついて下を見ないようにして登りました。石段が終わると狭くて石がゴロゴロしている道になり、転倒者も出るほどでした。途中に女人堂が建っており、さらに30分ほど登ると、日本一危険な参拝の核心部が現れました。足元が滑りやすく手すりが錆びて朽ちている頼りない鉄橋を渡ると、絶壁の鎖場です。真下に広がる日本海を見ないようにしながら、丸い鉄輪が連なった全長7mの鎖場を一気に登りました。最後は本殿でお参りをし、全員無事に下山しました。

大雪山・旭岳 8月27日（土）

北海道に3つの台風が上陸するという極めてまれな夏となり、一時は登山が危ぶまれました。しかし、当日は比較的天気が高く、通行止めも解除されたため旭岳登山を決行しました。

旭岳ロープウェイ山麓駅からロープウェイに乗り込みました。当日は、遠くに十勝岳、忠別岳、トムラウシを望むことができるほど快晴でした。10分ほどで姿見駅に着くと、地獄谷の噴煙が吹き出ている様子が手に取るように見えました。歩き始めて15分ほどで姿見の池にたどり着きました。ここまでは観光客の姿も多く見られましたが、この先は足場の悪い登山道で、ザラザラした火山性の小石が滑りやすく、転ばないようにするのが大変でした。普段着でしかも子どもを背負って登る人、中国から一家で北海道観光に来た人、犬を連れた人もおり、それぞれに登山を楽しんでいました。2,000mを超える高度で酸素が薄く、息を切らしながら頂上を目指し、雄大なパノラマが広がる北海道の最高峰、大雪山・旭岳の頂上に到着しました。御鉢平を眼下に望み、雲海の下には緑のじゅうたんが広がっていました。標高2,290mの北海道で一番高い山に登ったという実感は何物にも代えがたい感動でした。

（北大山岳会）



太田山神社本殿



御鉢平



旭岳山頂

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成29年2月7日）

- 議案・共同プロジェクト拠点の評価と更新について
- ・北海道テレビ（HTB）との連携プログラム協定締結について
- 協議事項・高等教育推進機構の組織再編について
- ・全学運用教員の措置について
- 報告事項・留学生宿舍の新規借入に係る結果について
- ・超過勤務実績について
-

教育研究評議会（平成29年2月15日）

- 議題・高等教育推進機構の組織再編について
- ・発明補償金の取扱いの変更について
 - ・諸規則の一部改正について
- 報告事項・理事の交代等について
- ・共同プロジェクト拠点の評価と更新について
 - ・寄附分野の設置について
 - ・北海道テレビ（HTB）との連携プログラム協定締結について
-

役員会（平成29年2月20日）

- 議案・高等教育推進機構の組織再編について
- ・クロスアポイントメントの適用について
- 協議事項・教職員休暇制度の見直しについて
- ・就業規則関連規程の一部改正について
- 報告事項・高等教育推進機構による構成施設の評価結果について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

（平成29年3月1日海大達第14号）

本年3月1日付けで、工学研究院に新たな分野を置くことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学設備市場規程

（平成29年3月1日海大達第15号）

本学において実施する設備市場の運営に関し、所要の定めを行ったものです。

■ 研修

平成28年度法人文書管理に関する研修会

開催期間：平成29年 3 月 2 日

開催場所：百年記念会館大会議室

研修目的：法人文書管理に関する事務を担当する事務職員に対して、必要な基礎知識を習得させるとともに、各職員の意識及びスキルの向上に資することを目的とする。特に今回は、本学大学文書館公文書室の国立公文書館等指定後における法人文書管理の流れを中心に、大学文書館内の見学も行いながら実務者の理解を深めることを目的とする。



講義「法人文書管理の概要」
(井上高聡大学文書館准教授)



大学文書館の施設説明
(山本美穂子大学文書館技術専門職員)

(総務企画部総務課)

「相手に伝わる文章の書き方」講座～業務実績報告書の作成例を交えて～

開催期間：平成29年 3 月 3 日

開催場所：百年記念会館大会議室

研修目的：各総長室等の年度計画または実績報告書の原案作成を担当する事務職員に文章作成の基本的なスキルに加え、相手に意図が伝わる文章を構成するスキルを備えさせ、ステークホルダーに対して本学の取組・成果を効果的にアピールするとともに、文部科学省（国立大学法人評価委員会）から良好な評価結果を獲得することを目的として本講座を開講する。



日本経済新聞社 小出由三講師



講義・グループワークの様子



受講風景

(総務企画部企画課)

■表敬訪問

国内

年月日	来訪者
29.3.6	日本特殊陶業株式会社 代表取締役会長兼社長 尾堂 真一 氏

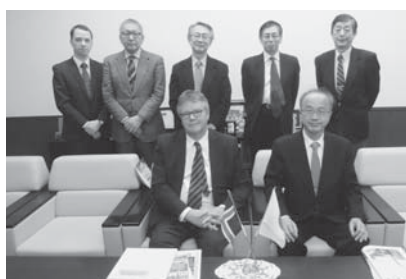


日本特殊陶業株式会社
代表取締役会長兼社長 尾堂 真一 氏 (右側)

(総務企画部広報課)

海外

年月日	来訪者	来訪目的
29.2.2	Hannes Heimisson 駐日アイスランド共和国大使	両国の交流に関する懇談



Hannes Heimisson
駐日アイスランド共和国大使 (前列左側)

(国際部国際連携課)

■人事

平成29年2月10日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	笹 森 徹	北海道大学病院助教

平成29年2月12日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	姜 允 敬	大学院工学研究院助教

平成29年2月20日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 大学院情報科学研究科准教授	山 下 倫 央	採用

平成29年2月28日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 (辞職)	古 月 文 志	大学院地球環境科学研究院教授
【係員】 (辞職)	石 倉 沙 織	学務部学生支援課
【技術職員等】 (辞職)	濱 大 志 齊 藤 奈 美 石 井 久美子 賀 集 仁 美 木 村 優 駿 藤 原 亜 樹 野 田 美 帆	水産学部附属練習船うしお丸甲板員 北海道大学病院薬剤部薬剤師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部助産師

平成29年3月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院経済学研究科教授 大学院メディア・コミュニケーション研究院教授	今 井 晋 北 村 倫 夫	採用 採用
【准教授】 大学院情報科学研究科准教授 大学院水産科学研究科准教授 高等教育推進機構准教授	坂 本 大 介 清 水 宗 敬 奥 本 素 子	採用 大学院水産科学研究科講師 採用
【講師】 大学院薬学研究院講師	高 倉 栄 男	大学院薬学研究院助教
【助教】 大学院薬学研究院助教 大学院保健科学研究科助教	横 井 佐 織 趙 瑤 瑤	採用 採用

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
大学院保健科学研究所助教	吉 田 一 生	採用
大学院工学研究所助教 (転出)	山 本 泰 功	採用
東京大学大気海洋研究所助教	松 村 義 正	低温科学研究所助教

新任教授紹介

平成29年3月1日付



経済学研究科教授に

いまい すすむ
今井 晋 氏

現代経済経営専攻経済政策講座

生年月日

昭和38年 8月 7日

最終学歴

ミネソタ大学大学院経済学研究科博士課程修了(平成10年2月)
Ph.D (経済学) (ミネソタ大学)

専門分野

産業組織論



メディア・コミュニケーション
研究院教授に

きたむら みちお
北村 倫夫 氏

メディア・コミュニケーション部門
国際広報論分野

生年月日

昭和32年 7月 4日

最終学歴

北海道大学経済学部経営学科卒業(昭和56年3月)

専門分野

パブリックセクター広報, 公共・行政経営,
都市・地域政策

訃報

名誉教授 うえやま えいいち 上山 英一 氏
(享年85歳)



名誉教授 上山英一先生が平成29年1月11日に逝去されました。先生は昭和7年1月に北海道夕張郡角田村にて出生され、同29年3月に北海道大学農学部畜産学科を卒業されました。昭和32年まで北海道立農業試験場宗谷支場にて技術補として勤務された後、北海道大学農学部畜産学科助手に採用されました。昭和36～38年までアメリカ・ハワイ大学東西センターに留学された後、同39年に北海道大学農学部の新設された附属酪農科学研究施設助教授に就任、同54年には教授に昇任、同研究施設生産部門を担当されました。平成4年同研究施設の廃止決定により、農学部配置換えになり、以降乳生産学研究室を担当され、同7年3月に退職されました。この間、獣医学部の講師を

併任され、農学部附属酪農科学研究施設立ち上げ時に尽力されるとともに、同施設長も務められ、教育研究ばかりでなく大学運営にも大きく貢献されました。さらに学外においても札幌大谷短期大学非常勤講師として教育にあたられました。ご退職後の平成7年4月には、北海道大学名誉教授の称号を授与されております。

研究を通しては、乳牛の栄養・飼養・泌乳に関して多大な成果をあげられ、畜産学と畜産技術の進歩発展に大きく貢献されました。先生の研究業績は乳牛全般に関する広範囲なもので、特に牛乳成分組成の変動とそれに影響を及ぼす要因に関するものが出色でありました。牛乳中の脂肪、無脂固形分及び各種微量成分含量の変動に及ぼす乳期、季節、飼料などの影響を検討し、特に反芻胃内発酵によって産生される揮発性脂肪酸の組成が乳成分組成に関連していることを明らかにされました。また、北海道内の酪農家における乳牛の飼養実態と乳成分組成の関連についての調査・解析などもあわせて行い、酪農生産現場における牛乳成分組成改善に大きく貢献されました。放牧を中心とした草地利用型の牛乳生産

に関する研究、乳牛用新飼料資源の飼料価値に関する研究、乳用子牛の育成に関する研究など、乳牛の栄養・飼養の基礎及び応用分野でも多くの成果をあげられました。上山先生は学会活動にも尽力され、日本畜産学会、同北海道支部、北海道畜産学会の評議員、北海道家畜管理研究会の副会長・評議員として、要職を務められました。

以上のように、上山英一先生は北海道大学助手に採用されて以来、教授としての15年間も含め37年の長きにわたり、教育・研究面で優れた業績をあげられ、学術の発展と後進の指導育成に尽くすとともに、大学の発展に大きく貢献されました。また研究成果の社会還元にも確かな足跡を残されており、そのご功績は誠に大きなものです。後進指導にあたっては常に温かく、余暇の話題も豊富で、張りのある歌声で場を和ませた記憶は数え切れません。先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(農学院・農学研究院・農学部)

准教授 まさき むつこ 眞崎 睦子 氏
(享年55歳)

准教授 眞崎睦子氏は、平成29年2月3日に脳内出血によりご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

眞崎先生は昭和57年3月に活水女子短期大学英文科を卒業後、平成5年4月に大阪大学法学部法学科に編入学され、同7年3月に同学科を卒業、同年4月に大阪大学大学院言語文化研究科言語文化学専攻修士課程に進まれ、同9年3月に同課程を修了、修士(言語文化学)の学位を取得されました。その後、平成9年4月に大阪大学大学院言語文化研究科言語文化学専攻博士後

期課程に入学され、同14年3月に同課程を修了、博士(言語文化学)の学位を取得されました。平成16年4月に北海道大学言語文化部助教授として着任され、同19年4月にメディア・コミュニケーション研究院准教授に配置換えとなりました。

北海道大学にご着任以来、眞崎先生は全学教育の英語教育をご担当になるかわら、教育学院多元文化教育論講座において学生指導に当たっておられました。また全学教育ではここ数年「社会問題としての飲酒」を主題別科目として開講され、眞崎先生が活動に協力している断酒会の会員の方をゲストにお招きするなどして、社会的現実

に「当事者同士が行う相互教育の場」の重要性を説いてこられました。ご研究の面においては、『渡米移民の教育』『お酒を手にした未成年のあなたへ』という2冊のご著書を中心にして、一般の方々が自ら経験した困難を同じような境遇にある他者と共有する、互助的な関係の場の社会的意義について研究を深めていらっしゃいました。

教育、研究の両面において今後ますますのご活躍が期待されたところ、眞崎先生が急逝されたことはかえりませんが、残念でなりません。ここに心からのご冥福をお祈りいたします。

(国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院)

ごとう かんじ
名誉教授 後藤 寛治 氏
 (享年95歳)



名誉教授 後藤寛治先生が、平成29年2月13日に逝去されました。ここに先生の前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、大正12年7月5日札幌市に生まれ、昭和18年10月北海道帝国大学農学部農学科進学後に応召され、同20年9月に復学し、同22年9月に卒業さ

れました。直ちに北海道農業試験場に勤務され、昭和25年1月国立遺伝学研究所に転出し、同31年4月から1年半、アメリカ・アイオワ州立大学に留学され、帰国後に北海道立農業試験場十勝支場及び北海道農業試験場に勤務されました。昭和45年4月に北海道大学農学部教授に就任して農学科食用作物学講座を担当され、同62年3月に停年退官されるまで農学部の教育と研究指導に尽力されるとともに、本学評議員として本学の運営に参画されました。

食用作物と牧草の遺伝・育種学並びに生理・生態学に関する研究を展開され、遺伝要因と環境要因の相互作用を定量的に解析する手法（「選抜の場の理論」）を開発して国際的に高く評価されるとともに、実際の育種現場で利用して多数の優良品種を育成されまし

た。また、日本の環境条件下における乾物生産の特異性を解明して育種・栽培法の改善方を提示するとともに、複数の作物で栽培種と近縁種の交雑を行い、現在でも育種母材として利用されている超多収系統を作出されました。

社会に対しての貢献も惜しまれず、日本学術会議会員、文部省学術審議会専門委員、日本作物学会副会長・評議員、同北海道支部長、北海道草地研究会副会長・評議員、北海道開拓審議会委員、同農政審議会委員、同種苗審議会委員などを歴任され、学問の振興と社会還元に対して大きな役割を果たされました。

先生の御霊が安らかでありますよう、ご冥福を心より祈念いたします。

(農学院・農学研究院・農学部)

よねみつ おさむ
名誉教授 米光 幸 氏
 (享年86歳)



名誉教授 米光 幸先生が平成29年2月23日にご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、新設まもない北海道大学医学部薬学科に昭和31年5月に助手として着任されました。その後、昭和39年2月に東京大学において薬学博士を取得され、同年6月からアメリカ国立衛生研究所 (NIH) の客員研究員として在外研究をされました。帰国後、昭和41年7月に北海道大学薬学部の助教授に昇任され、同43年9月、植物薬品化学講座の教授とされました。植物薬品化学講座は平成4年改組により精密

合成化学講座となり、同6年3月停年退官されるまで同講座を担当されました。この間、北海道大学評議員、機器分析センター長、薬学部長等を歴任され、学外では学術審議会専門委員、日本学術会議化学研究連絡委員、日本薬学会理事、本学退官後には同会頭等を務められ、本学及び日本の薬学研究の発展に多大なる貢献をされました。

先生のご専門は有機化学ですが、その内容は複素環化学、有機光化学、天然物化学等と極めて多岐にわたります。例えば有機光化学に関する研究では、現在主流となっている「電子移動光化学反応」の先駆的反応例を発見されました。また後年は生理活性天然物の全合成へと研究の軸足を大きくシフトされ、「DDQ酸化による非常に穏和な条件下で脱保護できる保護基MPM (PMB) 及びDMPM (DMB) の開発」、「マクロラクトン化における計算化学を用いた配座解析の活用」など、新しい方法論や一般性の高い新反応を開発しつつ、マクロライド及びポリエーテル抗

生物質の高立体選択的全合成をいくつも達成されました。これらのご業績に対して、平成2年度日本薬学会学術賞が授与され、また「重点領域研究」（現在の「新学術領域研究」）「キラル分子の不斉合成」の研究代表者（同5～8年）をお務めになられました。

北海道大学をご退官後、平成6年4月に岡山理科大学理学部化学科教授に就任され、同14年3月の同大学定年退職後も同大学特任教授、同大学院非常勤講師を同18年9月まで勤められました。

岡山理科大学をご退職後は札幌に戻られ、薬学部や同窓会の行事でお元気な姿をつい最近まで拝見しておりましたので誠に残念でなりません。

ここに、先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(薬学研究院・薬学部)

編集メモ

- 日中の日差しの暖かさに、少しずつ春の気配が感じられる季節になりました。
- 3月8日（水）、21日（火）に高等教育推進機構前で行われた合格者の発表では、一足早い春をつかんだ合格者たちが、家族や友人、在学生らとともに喜びあう姿が見られました。





2016.3.19 函館本線・千歳線 苗穂～白石（札幌市）

北の鉄道風景 48 JR最後の急行列車「はまなす」

速達列車の一種別である急行列車。その上位の特別急行列車（特急）の一般化によって、JR各社での急行列車の運行数は激減した。夜行急行「銀河」（東京～大阪）の廃止以降、札幌～青森間の「はまなす」がJR最後の急行列車であった。その「はまなす」も、北海道新幹線の開業などを理由に廃止されて1年が過ぎようとしている。写真は「はまなす」が札幌の街を発つ光景だ。同列車から東北新幹線に

乗り継げば、札幌を夜10時に発ち、翌朝の9時半過ぎには上京できるという利便性の高さがあった。新函館北斗で東京行き「はやぶさ」の始発便に接続する、「はまなす」と同じような夜行急行があれば良いのだが、昨今のJR北海道に、そのような列車を運行する余力が無いのは寂しい限りだ。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ③ No.756 平成29年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html